

北浦乱菊ものがたり

作 宮 原 英 一

県紙 山口新聞に連載

一章

本州最西端、山口県下関市。そこから十数キロおの、内日（うつい）という農村。ただ 田んぼと山しかない、

日本のどこにでもある のどかな農村風景の盆地である。

そこに近松門左衛門の親筋といわれる 長府毛利藩筆頭家老 楢杜（すぎのもり）家の菩提寺（ぼだいじ）泰栄寺がある。これもまた、農村のどこにでもあるような、とりたてていうほどもない、ひなびた小さな寺である。寺のよこの空き地には、あかるい秋のひざしの中に、楢杜家譜代の墓が 立ちならんでいる。

歴史は、すでにここに眠る人々を、はるかな忘却の彼方におしやり、ときどき 落ち葉が ひらひらと舞いおるほかは、誰も訪なう人もいない。

この墓地に、村人にいまにつたわる伝説がある。

・・・ 楢杜の墓地には、いまだに浮かばれぬお女中の魂が眠っているげな。

それがどこの女であるのか、どんな不条理が、女を苦しめたかを問えば、村人の誰も首をかしげる。

当時ご家老として、権勢をふるった名のある人々は、その存在すらも忘れさられている。

にもかかわらず、無きにひとしい小さな生しか持てなかった、この女の魂だけが、ひとり村人の胸のなかに生きつづけて、伝説をたやさない。

ふるさとの史書に、ただ 不倫の女というのみを記されて三百余年。

世に得たみじかい命を断たれ、なお今にそのすすり泣きが、村人の心をはなれぬ無名の女。

それが平馬こと、近松門左衛門を生んだといわれる おいねという女である。

この伝承には、深いなぞがある。

風のなかに村人は、自分たちの心の奥ざしきに、歴史の深奥にうずまいた劫火（こうか）を世にかたりかけ、しのび泣く女の声をきくことがある。

そんな時には、この墓場の隅のそれらしい 小さな石くれの前に、山に咲く野菊を一輪さしそなえて、彼女の鎮魂をいのるのである。

この無名の女の浮かばれぬ魂が、村の伝説から消えるとき、近松は 彼を生んだこの母のふところに 帰るのかも知れない。

ここから北上すると、山陰の港町である長門に出る。

このあたり萩、長門、美祢一帯を北浦地方という。

秋の長門の海は、あかるいマリンスプルの、魅せられるような深く透明な色をしている。しかし、日本海に面したこの北浦地方の冬の海の、沖あいから攻めよせる波は、白い牙をむぎだした狼が群れをなし、身をおどらせて走ってくるような、おそろしい形相（ぎょうそう）を見せる。

それは女が ひとりの人間として、生きてゆくことを許さなかった時代 そのままの姿で、この浜の堤防につきあたって、くだけ飛ぶのだ。

二 一章

浜にでると、乾いた魚のうるごと、乾燥しきつた海草の匂いのまじった 香ばしい濃い海の匂いが、プーンと鼻をつく。徳川四代將軍、寛文の頃の長州藩、長門国深川は 小さい漁港である。

中心部に、軒のひくい商店が コチャコチャと、軒をならべていて、中心からは、かなり離れてはいても、江良（えら）の梶杜屋敷といえば、当時は、誰知らぬものない権勢を誇っていたという。

いかにも朋友の梶杜就幸に、用事があるようなそぶりをよそおい、おいねを訪ねてきた市村清三郎の、足をとめるかのように、雨が昼すぎから 深川の町なみに、ざんざんと横なぐりにふっていた。だが、夕方になり、彼が帰ろうとして、梶杜屋敷の低いさむらい門を、くぐる頃には、雨音もとだえ、夜霧がしっぽりと夕闇をつつんでいる。

さむらい門から 表ての道路まで、両側を高い杉の垣根で かこんだ長い細道が続いていて、蛇ノ目の相あい傘で歩くおいねと清三郎の姿に、気づくものは誰ひとりいなかった。

「長雨に足をとられて、ついつい長居をした。それでは、これだ」

清三郎は、おいねに軽くえしゃくをした。

「たいしたおかまいもできませんで」。

朋友就幸の留守にきて、上がりこんだ清三郎のお膳の酌の相手をして、まぶたのあたりを、心なしか ほんのりと酔いにそめ、一歩ひいて、背中から蛇ノ目傘を さしかけていたおいねは、清三郎のうしろから、「ニッコ」とほほえんで見せた。

「おっとと・・・」

あたりに人気のないのを、それとなくたしかめた清三郎は、酔ってよろめいたふりをして、おいねにすがり、胸もとに手をふれようとしたり。まだこどもを生んでいないその乳房は、ほどよくふくらんでいて、乳首がびんと 上を向いている。

さつきから、おいねが酌をしてうつむくたびに、それが清三郎の目についた。

「あら、ごむたいな。いけません」

おいねの両手は、蛇ノ目傘の柄をにぎっているから、自由にならない。
おいねはあぶなく、身をかわして、さむらい門の門柱のうしろに隠れた。
その目はふくみ笑いをしている。

「おいねどの」

清三郎は追いかけて、おいねを抱きすくめようとした。

「誰か、向こうから人が訪ねて来ますわ」。

「どっ」

あわてた清三郎は、びくつとして離れたが、嘘と気づいて

「では、人に見えないところなら、いいのか」
とささやいた。

おいねは、えくぼを見せて、クスクスと笑う。

「わたしは人妻ですわ」

「おいねどの」

清三郎はあえいだ。

「悪いお酒ですこと。お帰りあそばせ」

「ようし。今日は帰ってやる。今度きた時はいいな」

それほど酔っているわけでもないが、酔いにかこつけて、清三郎はけんめいである。

「まあ」

おいねは、わざとあどけない顔をつくり、またクスツと笑い、まじまじと清三郎を見つめた。

おいねは三十二才であった。

頬のふっくらとした色白の、目もとの涼しげな美しい女である。肩から腰にかけての線が、すべるような、まるやかさで流れていて、長い髪を無造作にうしろでたばね、腰のあたりまでたらしめている。

さきほどの戯れで、小袖がが少しはだけられ、もち肌の胸を、あえぐように弾ませながら、その濡れたような大きい黒い瞳が、清三郎を見あげていた。

「市村さま、かんにんして。お願い」

清三郎が酒くさい熱い息をはきかけると、おいねは、やや傾きかげんに、身をくねらせて、門柱に身をくずすようにしてすがり、恥じらいを見せながら、哀願するように、清三郎に、じつと手をあわせる。

それが、今にもくずれ落ちんばかりである。

決して悪気ではないが、そんな時のおいねは、熟れきって、いまにも落ちそうなくろである。

それが天性なのか、少し酔うと、おいねは、清三郎にいつも、そういう姿を見せるのである。かといって、清三郎が迫ると、するりと逃げてしまう。男がますます燃え上がるのを知って、誘っているとしか思えない。

清三郎は、狂いそうになる自分を、やっとおさえた。

「では、今日のところは帰るとする」
女の肌に漂う妖気を見やり、なま唾を飲みこみながら、清三郎は、未練げに嘆息した。

曲がり角の多い杉垣の続く 細道の向こうの道に、馬のひずめの音が 響きはじめれば、あるじの楳杜改め志道就幸が、萩城から於福屋敷にかえる途中に、いったんこの長門へ馬でやってくる。

今は江戸屋敷詰めだと、先に調べておいたし、なにくわぬ顔で 聞いたおいねのこたえも 江戸だとたしかめている。どうせ 今夜は、だれも来るわけがない。他人がたずねてくる屋敷ではないから、霧にとざされた今夜など、この道は人目を忍ぶ男と女が、そぞろ歩くには、絶好ともいえる。

清三郎にも、相手は正妻ではなく、囲われ女だという心安さもある。

留守を承知で、あるじにあいにきて、酒膳をよばれては 酔いにかこつけ、おいねに近づく清三郎である。

その心中は、おいねにもわかつている。

だからといって、それを主人に告げるだけの証拠はないし、あるじがないからと、むげに帰すわけにもいかぬ。主人の朋友のひとりでもある。

おいねはあいそよく、酒の相手をして、清三郎の無聊を 慰めているうちに、ずるずると いつの間にか、きわどい戯れに引きずりこまれていた。

しかし、あれは酔ってのほんの冗談だと いわれれば、それだけのことでもある。強いて角を立てるほどでもないといえば、そうも言えた。

志道就幸は 長府藩家老楳杜家から、本藩家老志道家に養子にきたが、妻はやはり萩本藩家老の口羽家の堺の縁者から招いての養子である。だから正妻はここから 中国山脈のおくにはいった美祢は、於福の志道屋敷にいた。

幼い正妻は結婚すると しばらくして病死した。

その妻の実家の堺から、再び妻の妹を後妻としてむかえている。

関ヶ原合戦に、やぶれて領土をうしない、防長二州にとじこめられるまでは、中国の雄藩毛利とよく語られたが、戦国武將記（中公新書）によると、毛利は徳川家康のような大名系列の武將ではなく もともと公家系列いである、

広島県の国人領主たちが集まり、いっさいを共同解決、共同扶助をしながら、のしあがっていった。俗にいう一揆大名であるとある。

その連判状は、傘（からかさ）連判といわれ 有名だが、まんなかをあけて、それぞれが 円陣署名をしている。筆頭も末尾もない。敗北したときには、連判状の責任者がいなくて、連帯責任である。逆に勝った時も特権者はいない。

志道家はその毛利十家のひとつであり、代々本藩家老 口羽家から嫁をとる。これは志道家のしきたりである。だから志道就幸の妻が 他界すれば、後妻はまた 口羽家の血縁から嫁いできた。

就幸が養子にむかえるまえの、志道家於福屋敷の当主は体がよわく、ずっと病床にあり、志道家をつぐと すぐ他界した。こどもはいなかった。部屋住みであったその

弟が、いつの間にか、兄嫁の寢室を独占していた。未亡人が妊娠して、生まれた子がおいねであった。むろん正式には誰の子でもない。認知されず、父親のない家女というあつかいで、育った。

とうじは、女は十三才になれば、もう結婚適齢とされる。前の妻もそうであったが、後妻も幼かった。堺からいきなり、山陰の山おくの、志道家に連れてこられる。そこは金山（かなやま）といい、毛利のドル箱である銅が産出される。志道はその於福が領地であった。自然がうつくしい、山にかこまれた農村である。

堺からきた幼い後妻は、一日中、自分の部屋で、堺から連れてきた付き添いの女中と、カルタをしたりして くらしている。

床入りも形式的で、妻とは名ばかりのあどけない少女である。

おいねが娘盛りになったころ、長府藩家老梶杜の長男である青年就幸が、志道の後継者として選ばれ、口羽家からきた嫁とともに、養子夫婦としてやってきた。その嫁とおいねはおなじ年であった。

ふすまの陰で、ときどき、就幸と前妻の しどけない寝間の声を聞き、男女のまぐわいを 目のあたりにしながら 眠られぬ夜は、自らをただ慰めて 眠るだけの日々であった。

突然、就幸の妻が死んだ。

あわただしい葬儀がすんで見れば、堺からきた後妻は あどけない少女である。

おいねは二十歳にちかい。

いきおい、就幸の身のまわりの世話や、台所はおいねの差配になる。

前妻が生きている間、彼女のすることを いつも見ていたから、むつかしくはなかった。

就幸は、能吏である。

それまでの長府藩家老職は 次男の梶杜元周に譲っている。一生 部屋住みと思つて、のんきにくらしていた弟元周に、とつぜん舞いこんだ長府藩家老職は、大変な重荷である。実は萩本藩と長府藩は 親類ではあるが、藩主どうしがなにかと仲たがいが多く、両藩の家老は心痛していた。

長府藩家老の就幸が 本藩家老として、スカウトされた理由でもある。中間の長門は 萩藩の直轄地である。萩本藩家老になった就幸は、そこに別の梶杜屋敷を置いた。長門の郷土史家によると そこは 長府藩家老になった弟 梶杜元周と両藩調整のため、非公式の談合の場所であったという。

於福の志道屋敷から萩城へのゆきかえりに、長門の屋敷にたちより、それから帰る。寝るのは毎晩おそい。

たいてい夜の十二時を過ぎ、風呂に入る。おいねはそれまで起きて待っていて、就幸の風呂をわかった。

「おいねさん。すまんのう。」

就幸はときどき風呂から、焚き口にいるおいねに、やさしい声をかける。

「いいえ。旦那さまこそ、遅くまでしごとされて、体をこわされんように。」

この家では、家来は殿さまと呼ぶが、家人は誰でも 就幸を旦那さまとよぶ。こうして二人きりで話していると、夫婦の語らいのような気がして、暗がりでも、おいねは頬を赤らめていた。

ザアツと音をたてて、就幸が風呂からあがるころ、おいねは洗濯をした下帯を出して、そのうしろにまわる。

「あれ。旦那さま。そんなところに傷が」

「うん？ ああ、ここは馬の鞍で、こすれてのう」

「痛いでしょうに」

「いや、これくらいを痛いなどというては、侍はつとまらない」

「まあ」

そんな会話をしながら、うしろから、就幸に寝巻きを着せる。

「・・・？」

着物をきせられた時、就幸はふと気がついた。

彼の癖で、袖を通す時、かならず、左の袖からでない腕を通さない。

・・・変なくせ。大抵のお人が右からなのに

死んだ妻が、よくそいつって、背中から着せながら、クスクスと笑ったものである。

そういえば、妻が亡くなってからも、風呂からあがって、後ろから着せられる時、

袖はこつちからだと注意したことがない。

おいねが、黙って左うしろからさし出して、着せていたのである。

(あれからずっと、おいねが、うしろから。)

就幸は、手柄顔ひとつみせぬおいねに 妻のおもかげを感じた。

「おいねさん」

「あい」

おいねは返事をするひまもなく、就幸にいきなり抱きすくめられて、ああむけにされた

男の手が、からだにふれるたびに、おいねは恥ずかしさで、息も絶えだえになり、両手で顔をおおった。

就幸の熱い息が、おいねの目の前に迫った。

「あっ」

小さい叫びをあげ、瞬間の反応で、腰を少し浮かすようにしながら、おいねは、いやいやをするように、上気した顔を横にふる。そのしぐさが、初々しくて、就幸はおいねの唇を荒々しく吸った。

庭の木立ちで、夜蝉があたりをはばかるように 静かに鳴いていた。

やがて夜蝉の音が ぷつんととだえると、おいねは就幸をみあげて、その胸に顔を埋め、すぎるようにつぶやいた。

「奥方さまに、なんと」

「お前は長門の楯杜屋敷に置くことにしよう。あそこなら、志道家の女は、立ち入りができない」

「まあ、あそこなら海がある」

おいねの子供のようなことばに、就幸は白い歯を見せた。

「そうだ。いやかな」

おいねはかぶりをふった。

「うれしい」。(ずっと前からこうなるような気がしていた)

それは口に出さなかった。しかし、おいねは、もともとはじめから、就幸を慕っていた。

・・・殿様の茶飲み伽ぎ(ちゃのみとぎ)に

そういつ名目で、しばらくして、おいねはこの深川の梶木屋敷に越してきた。

志道のものは、妻は無論のこと一切立ち入る事はできない。

萩城からここなら、海を馬でひと走りである。おいねを側女にした就幸は、政務多忙を口実に、妻のいる於福の志道屋敷には帰らず、ほとんどを、ここで過ごした。

もともとおいねは、女として日陰の苦勞をして育ったから、愛想よく、まめまめしく仕える。

志道家の妻である母親の姿と顔だちをついでいて美しい。

その上、おいねは、小さい時から暇にあかせて、志道家の土蔵から蔵書を出しては、読みふけていて、詩歌をよくした。だから、深川町では、その気品と気立てのよさとすぐれた知性で、「みなと小町」と呼ばれるほど、評判を集めていた。

こうして就幸の側女になって、かれこれ十年をすぎ、おいねは女ざかりを、むかえていた。

あるじの就幸は、ひさしぶりに生まれたあとけない藩主の跡目相続を 家老として幕府への根まわしをしなくてはならない。江戸屋敷家老になった。

三ヶ月に一度くらいしか、こちらには帰らない。

ずっとひとりで待ちわびるおいねには、いつ果てるともない空しい日々ばかりが続く。

元禄は、当時の世相記によると

・・・夫の職により他国づとめ留守の内、又は在所逗留の留守を考え、召使のうち心おきなき女子をかたらい、ひごろ心にかけてし男を引き込み、また夫の朋友などと馴染み、あるいは色々の手管をまわし・・・中略・・・手前の身の皮をはいでも蜜夫(まぶ)にこれをあたえ、家にて会いがたきは、寺参りよ、物詣でよとかこつけ・・・また兄嫁の身として、夫の弟と不義をし、姑の身として、婿を寝取りて、実の娘をにくむなど・・・後略・・・(宝歴のころ書かれた、法忍「続人名」より)

とある。

江戸は幕府の政策により つくられた新興都市である。人口百万の内、比率でいう

と 男七に対して女が三くらいしかいない。そこへ参勤交代の武士たちが、三年間、単身赴任で集まる。江戸では遊廓が急速に発達したが、反面、地方では 妻女のほとんどが、空閨のまま残されるという 生活のゆがみをつんだ。

元禄は、現代にも通じる性の爛熟の匂いがする。

寺参り、物もつでや観劇は、愛人と忍び逢う人妻の 口実でもあった。

おいねの愛敬のよさと善意のまめまめしさは、なまじつか、おいねが美しいだけに、男につけこまれる隙にもなった。

就幸が留守勝ちであれば、おいねが何くれとなく、身の上の相談を寄せる人も要る。就幸の朋友の市村清三郎という侍が、ときどき就幸の留守の、梶木屋敷を訪れてあがりこんで、酒食のもてなしにあずかり、おいねの相談にのっていた。しかしそのうちに、おいねに別の感情をもつようになっていた。おいねも、快活で、男らしく、あごが張っていて、苦み走った清三郎を、心中では憎いわけではない。一歩まちがえば、愛欲のきずなが、結ばれんばかりの 危険な距離に接近してくる清三郎を焦らして、秘かに楽しんでいるという一面もあった。

ずっとひとりでめつたにこぬ就幸を まちわびるおいねが、清三郎から官能を快く、揺すふられ 心中ひそかに楽しむのは、三十をすぎたばかりの女の身に、ごくしぜん ななりゆきである。

「かんにんして。それは今度にして。お願い。」

ひろい長門屋敷は女ひとりである。夕霧が立ちこめるもやの中で、ふたたび迫る市村清三郎の前に、逃れるすべもなく、頬ずりをされ、唇を求められたおいねは、懇願するように、身をもがいた。

「そうか。それなら、今日はこれで帰る。就幸どのには悪いが、次は、おいねさんの本心を見せてもらう。」

ついに、「冗談の域をこえた。

どうする事もできず、ずるずると、この次にと、その場逃れにやりすこしているおいねを、じっと見つめた清三郎は、おいつめられたネズミを、いたぶる猫のように、目のおくにあざけるような笑いをうかべ、それでもあきらめ切れぬような 高笑いをしながら帰っていった。

侍門まで大きい道からはだいぶかかる。

大きい猫がおいねの顔を見上げながら、足もとを横切る。

「いやらしい猫」。

おいねは眉を逆立て、蛇ノ目傘をとじて、柄の方を下にしたかと思つと、いきなり傘の柄で、その猫をたたいた。その剣幕のはげしさに、猫は驚いて飛びはねて、暗やみの向こうへ走り去った。

おいねの胸には、ふと燃えさかりかけた火を、むりやりに消した 残り火がくすぶり続けている。

遠くで馬のひずめの音が聞こえる。

清三郎が帰っていく馬の足音である。

おいねは大きいため息をついて、乱れた着物をただし、小雨に濡れ、額にほつれたびんをかきあげながら、そっと心臓に手を当て、遠ざかっていくひずめの音に、じつと耳を傾けている。

パカッパカッというその蹄の音は、おいねの胸の鼓動と、ふしぎに一致して、その音が遠ざかるにつれ、困惑したおいねの鼓動も 鎮まってゆくのであった。

三章

なにかいつも考えごとをしていて、いつ帰っても むっつりとして、入ってくる就幸が、今日はきげんよく、何か玄關で声高く話している。客を連れてきたに違いない。おいねは 着物の裾をつまみあげ、こ走りに急いで、玄關に出た。

「お帰りなさいませ」

手をつけて頭を下げたあと、見上げると、つれは美少年である。

まだ元服がすまないの、きちんと結びあげた前髪が初々しい。

「あら自然丸さま」

おいねは目をまるくした。

就幸の弟長府藩家老元周の次男、自然丸である。

「しばらく、お世話になります」。

前髪の美少年は涼しい声で あいつさをして、頭を下げた。複雑な事情があつて、どこへ行つても、じゃまもの扱いをされていて、すこしうれい顔の細おもてであるが、切れ長のキラキラ光る目もとをした 十四才になる少年である。

なにごとかと、おいねは就幸の顔を見あげる。

就幸がいった。

「そろそろ、こいつも武士の作法を身につけんといかん。しばらく、ここで預かることになった。よろしく頼む」

まもなく元服である。おいねは頭をさげた。

自然丸は、長男の梶杜広中とはふたごである。

当時は双生児を生むと不吉とされ、一人は、生まれた直ぐ、命を断たれるのがふつうであった。

それは産婆の心得であった。

「その子の命を断ってはなりません」。

産みの床から母親の命令である。産婆はうろたえた。当時は産床の女のいうことなど 相手にされない。しかし、墓を見ればわかるが、梶杜元周の妻、つまり自然丸の母親の墓は、夫元周のそれよりも格別に大きい。彼女は防府の毛利直系の娘であった。

産婆ははつとして、産床の女の目をみつめ、頭を下げた。

数年前に、本藩の世子が生まれている。松平の娘で、本藩藩主の妻は、どうしたわけか、生まれる子が弱く、つぎつぎに早逝する。だから今回生まれた世子も、内心は

誰も成人を危ぶんでいる。

もし本藩の藩主に後継者がなければ、毛利の血筋のどの子かに、白羽の矢が立つ。大名の血族には、常にそうした意識がひそんでいた。

幼子は自然丸と名づけられ、ひそかに育てられる事になった。

かなり経ってそれが江戸屋敷にいる就幸の耳に入った。

本藩藩主の跡目相続の最中である。

藩主には目にいれても痛くない世子がいるのに、複雑な問題になりかねない。

だが防府毛利の血を引いて成長している以上、いまさらどうするわけにもいかない。

双生児を残した父親梶杜元周は、本藩と妻の防府毛利とのせめぎあいには耐えかね、家老を辞職したいという。ついに就幸秘密裡に、自然丸を引き取る事になった。

そういうしがらみを背負っているから、自然丸は、どこへいっても、敬遠され、自然に書物や海に親しむ少年になっていた。長府屋敷でも、毎日浜べに行つてばかりいる。

下関は、源平の滅亡を賭けた壇の浦合戦の浜があり、遠浅の日は、広い砂浜を、小さい蟹が走る。平家武士の顔をそのまま、腹に模様に刻んだ蟹である。なぜか人の足音を聞くと、小さい板ぎれやかわいた海草の切れはしを、頭にかぶり、こそこそと隠れる。それがいかにも、逃げおくれた平家の武士のようで、平家蟹と人々は呼んでいる。

ほんらい産まれてはならぬ不吉な子、などといわれながら

成長することは、

少年の誇り高い魂を、何重にも傷つけた。

自然丸は浜べで、行き場のないわが身を、平家蟹に見るようで、棒切れで、かたっぱしから蟹の甲らをたたき潰した。

「この子は、いつたい、何を考えているのやら、わらわにはさっぱり解りませぬ」

と自然丸の母親は、そうつぶやいて嘆いた。

「梶杜の家督は、広中がつくとしても、この子には梶杜の領地の、ほとんどをやらねばなりません。おいねなら、詩歌の書に通じている。長門屋敷につれてゆき、あれに教育させましょう」

普通の部屋住みの次男ではない。

防府毛利を背にした奥方のお声がかかりで、生き残った子である。

就幸は愚痴も何もいわず、この防府毛利からきた女の顔を、じっと見つめ、もてあまされた自然丸を、長門につれて帰った。

「先日。市村さまがこられては、お待ちでした」。

玄関をあがる就幸に、おいねは切りだした。

「おう、清さんが来たのか。たんとご馳走をやってたか。」

「はい。お酒をめしあがられます。」

「ははは。それがあれの目的じゃ。たんと飲ませてやってくれ。頼んだぞ。おいね」

「はい。」

おいねを囲っているとはいえ、真面目一方。男女関係には、淡泊な就幸は、清三郎

の心を疑うことを知らない。それ以上は、もういいよつもなかった。

就幸はふりかえり、自然丸にいった。

「あがれ」

玄関にあがると、まるで自分の家のように、すたすたと自然丸は奥に歩いてゆく。

「あら、若様、足を拭かないと。まあ、まあ。早く袴を脱がないと、砂ほこりで」

傍若無人の自然丸。袴についた砂ほこりを、払うこともない。自分のはきものをそろえることもしない。世子に万一の時は、毛利の殿様になるといいきかされて、育てられたのか、それとも 全く野ばなしのままなのか、おいねは、はかりかねた。

ふと、いつかの夜、たわむれたあげく帰っていった清三郎の うしる姿が、何の脈絡もなく 胸に浮かんだ。

自然丸がいれば、もう一人は女中もいる。

女のひとり身につけこまれることはなくなる。

そう思うと、明るい気持ちになった。

「まあ。たいへんな若様だこと」

おいねは、いつになく、晴れ晴れとした声で、自然丸の下駄を ていねいに、そろえて、少年の後を追いかけた。

四章

長門の梶木屋敷の近くには、馬子たちのドライブイン駅遞がある。そこには自然丸と同じ年令くらいの馬子たちが集まる。

「新しくこられた梶木屋敷の自然丸どののために、馬を一頭お貸しするように」という伝達があった。

馬子たちのほとんどは、近くの農民や漁民の家に次男坊として生まれたいはずばかりの少年たちである。

「梶屋の殿様の家に、もてあましものの若様がきなさったとよ」

「馬を一頭貸せといや」

「くそたれ。この忙しいときに」

ぶつぶついいながら、屋敷に馬が連れ出された。

翌日から、自然丸

はその馬のたてがみをひつつかまえ、はだか馬のまま、背中にまたがるうとする。

馬という動物は、神経質な生き物で、なかなか新しい乗り手の手さばきには慣れない。まして、出会ったばかりの背に、鞍もおかずに、いきなりたてがみをつかまえて乗るなどとは危険そのものである。

見ていると、何回も振り落とされる。だが自然丸は少しも気にしない。振り落とされると、またたてがみをつかんで飛び乗ろうとする。馬はいやがって、また振り落とす。根くらべである。その内に、とうとう馬の方が負けて、自然丸の手の動きを覚えていく。

あいかわらず、自然丸の手綱さばきは下手くそである。

何回も転落しては、這いあがりながら、しかし自然丸はケロツとしてとびのり、馬上から、馬子たちに声をかける。

「よう。」

とたんに 馬が背中から揺すり落とす。

また這いあがつて、馬子の少年たちに手を振っている。

「あれを見ろ。」

そのしぶとさに、馬子たちはあきれた。

「下手くそで荒つばいが、あの根性に負けて、馬のやつ、とうとう 自然丸さまに慣らされるわい。」

あちこちすりむいて 血がにじむ膝小僧を忘れて、馬のたてがみをつかまえては 這いのぼる自然丸の姿。もてあまされものの若さまから、野良ばえの若と、駅遞に親しみまじりの通称が広がり、自然丸は、いっぺんに馬子たちと親しくなった。

ついに自然丸は、馬を鞍なしで慣らしてしまった。

深川の町を、はだか馬のたてがみを、驚つかみにひつつかまえ、馬子たちに手をふり、馬の背にまたがり、走りまわる自然丸の姿が見られるようになった。

一年の月日が過ぎた。

自然丸は相変わらず、海が好きである。ひまさえあれば、海に出かける。

彼方は朝鮮半島までひろがる長門の袖ヶ浦は、外海だから、砂浜もなく、防風林の松並木と、ゴツゴツした岩しかない荒い海辺である。

おいねは そんな自然丸の後を追いかけて 海に行く。浜べにおいねを置いたまま、自然丸は 沖合いの方に泳いで出ていく。波間に時には 姿が見えなくなる。おいねは ハラハラして見ていると、突然、とんでもないところから 頭を出して、ふうつと息をついて、青くなって きよるきよると探しているおいねの方に、手を振る。おいねが胸をなげおろしていると、また見えなくなる。

そんなことを繰り返していると、いつのまにか おいねは着物が濡れるのも忘れて 浅瀬に入っつていっつてしまう。

おいねは、自然丸が あちこちにたらいまわしにされるのを見て、自分の成長期を思いだしていた。おいね自身も、母親の背徳ゆえに、父親にあたる男がいるのに、父と呼べる人を持たない 少女時代をすごした。他人に物を言う時、一歩も二歩もさがって、物をいう屈折した性格をもっている。

自然丸はそういう自分の生い立ちについて 何もいわない。いわないから 余計に自然丸の心に思い至る。おいねはそんな自然丸がいとしく、今日も着物を腰までからげて、腰巻きのまま、夕暮れの海に腰まで浸かりながら はしゃいでいる。おいねの肌着は 波のしぶきでびしょびしょに 濡れてしまっていた。

自然丸は海からあがつて 濡れた体を、浜にあげて乾してある舟に横たえた。沖合の水平線に 真赤な球のような夕日が今にも着きそうだ。空はもう暗く、海は一面赤く光る波が キラキラしている。舟ばたの板が 太陽熱をいっぱい吸収していて、おぼろぬくい。

浜に近い海の中にいる 黒い影のおいねが声をかけた。

「若さま」

「なんじゃ」

自然丸は元服が近い。元服の後は主殿守広品と 姓も決まったている。嫁になる娘も 決められているが、当人はまだその娘にも一向に関心がない。

「いいえ、なんでもありません」

おいねは何か語りかけてやめた。

「ふうん」

「若さまあ」

波の間からまたおいねが語りかける。

「なんじゃというたら」

「南原寺の祭りを」

存じでしょう」

自然丸は、飛沫があがる波の音に、男らしい眉をしかめながら、おいねの声に、耳を傾けた。

於福屋敷の近くの伊佐南原寺。さくら山という 小さい山の頂上に寺があり、その昔 政権争いに敗れた花山院が、ひそかに身を隠したと伝えられる。秋祭の夜は、それを待っていた男女が 晴れて逢いびきをする。この夜は 若い男と女が、普段の堅苦しい礼儀作法を超えて、睡みあうことが認められている。こういう祭りを経て、少年少女たちはごく自然に 青年期をむかえていくのであった。

「おう、あの昔、花山帝が落ちのびたというお寺か」

おいねは海から、まぶしそくに自然丸を見上げ、ほら貝のように、両手をメガホンのかわりに口にあてて叫ぶ。 「おいねが、お嫁さんになる娘さんをお呼びますから、お二人であのお祭りにいって見られたら」

少年はいささかひるんだような顔をした。

「・・・」

「おいやです?」

「いってもいいが」

「まあ」。

困惑している少年を見上げ、おいねは軽い嫉妬を感じて、わざと笑い声をあげた。(ことういうことになる、まるで赤んぼみたい。もう、そろそろ元服というのに)。

裾をたくしあげた着物を片手でもち、もう片手で、海水をつしるにかきわけ、かきわけして、岸にむかって じゃぶじゃぶと歩きながら、おいねはつぶやいた。

おいねが 海からざあつとあがると、腰巻きから海水がしたり、濡れた緋色の布が、ぴつちりと おいねのふとももにはりついた。

逆光線とはいっても、おいねの腰からしたが、そのままに透けて、黒い茂みなどが現われる。

少年は、まぶしげなまなざしで、目をそらせた。

おいねは自然丸のまなざしには気づかない。

「あの娘さんなら、若さまに立派な花嫁ご寮さんになりますわ」。

このひとりぼっちの少年にも、もうすぐ青春がくる。何を想うのか、いつも遠くの海をみているような自然丸を見て、いじらしく、おいねはわけもなくいじらしく、

この少年を思わず抱きすくめてやりたいように 胸がうずいていた。

おいねはたかぶる心をおさえながら、砂浜にたつて、濡れた肌着の裾をていねいに絞っていた。

袖ヶ浦の浜へは、海べからいきなり 丸い石ころの多い浜になっていて、そこには松林の中に、漁師が網を置く小屋があり、漁の季節外れの時は、誰もこない。二人はいつもそこに乾いた着物を置いている。帰りには その小屋で着かえて帰るのが常である。

太陽が沈み 赤い光りだけが空をそめあげている。
夜が迫っている。

自然丸は、船ばたから跳ねおきて、その小屋に入った。中はうす暗い。彼はいつものように、そばの手提げ行灯の灯をつけた。ふとおいねの着物に目がいく。

自然丸が脱いだ着物のそばに、ならべ、おいねの肌着が丁寧に畳んで置いてある。

自然丸は鹿の子絞りの帯の下の紅色の小袖を見た。

瞬間、彼のからだに春の潮のような 切ない衝動がかけまわった。

最近の自然丸はここで、おいねの着物を見ると、青臭い欲望に駆り立てられ、そつとひとりで 性を果たしてしまうくせがついている。

潮がだんだん大きくなり、ついに奔流のように 彼をつき動かして、身体の中から外へ、一拳に噴出しようとするのをとめられなくなる。それにあわせて 手を動かすのに没頭している少年は、きむづかしげに 眉をしかめている。宙空を見つめる目は、さつき見たおいねの 白い太ももあたりの黒々とした茂みを 幻想に描いていた。

・・・きらめきが一瞬、頭の芯を くるったように貫通して、溶岩のような 熱い奔流が体外に噴出する瞬間に近い。少年の下半身で 激情が狂ったように荒れ、白熱の輝きが 脳にかけ昇り、彼は息を詰めて体をこごめた。

ふいに、小屋の戸がガラガラツと 音をたてて開いて、おいねがはいつてきた。

「あら、どうかしましたの」。

おいねは、荒い息をしている少年の姿に勘違いをして、驚いて駈けよった。

「まあ」。

背中をかがめた自然丸をみつけ、おいねは びっくりして息を呑んで、両手で顔をおおった。

自然丸の顔は険しく緊張して、全身がふるえている。

みるみる白い飛沫が うめくのくりかえしのたびに、あたりに飛び散る。

おいねは茫然として、ことばを失ったまま、大きくひとみをひらいて、じりじりとうしろに退がった。

「ごめんなさい。若さま」。

少年は唇をなめ、乾いた笑顔をちらと見せ、謝まるおいねの顔を見たが、頭の中はめくるめく幻想と現実の境界線で混濁していた。

「うしろの戸をしめて」。

自然丸の声は しわがれていた。その目は、思わずうしろ手で戸をしめるおいねの

下半身を凝視している。おいねの両手は、反射的に腰巻きの上からそこあたりをかくした。

「お願い。ゆるして。変なことをなさらないで。若さま」

おいねは頬をひきつらせて、小さい声をあげて 懇願しながらうつろへ退がる。

「・・・？」

おいねのことばが、まだ大人の世界に未経験な自然丸の頭を ますます混乱させた。肩で息をしながら 苦しげに眉を寄せて、少年はおいねをぎこちない目で見つめ、こちこちの笑顔をつくり、自分より少し低いおいねの肩に、手をかけようとした。

「いけませんわ。若さま」

おいねは、その手をふり払おうとした。何がいけないというのか、自然丸は おいねを見つめた。おいねもまた自分で何をいつているのか わからないままに、泣き声になった。

そしてつつ立つたまま、下腹をかくしていた両手を離して、上氣している赤い頬を包んで 少年をみあげた。

自然丸の顔がぐしゃぐしゃに歪んだ。それを見たおいねは、もつどうしたらいいか 判らなくなった。

おいねは、矢もたてもたまらず、自分の方からいきなり 自然丸の唇に、わなわなとふるえる自分の唇を押しつけた。こうするしかないような 切羽つまった気持ちであった。

二人は唇をふれあったまま、しばらくじっとしていた。やがて 自然丸のゆびさきが、おずおずと女の下腹にふれた瞬間、おいねはびくっと からだをふるわせた。

おいねは目をつむったまま、しばらくじっとしていたが、やがて大きく ため息をついたかと思つと、急に大きくあえぎはじめた。

「若さま」

かすれ声のおいねの息は 火がついたように火照っている。

「一度だけなら・・・早くしてね・・・お願い早く・・・今直ぐ。」

すっかり度を失つてしまつて、聞こえないような小さい声で、意味のわからないことを つぶやきながら、おいねは熱っぽい目を、自然丸の瞳に釘づけにしたまま、からだを離し、腰ひもをほどいた。そしてもどかしげに、濡れた肌着を脱ぎ捨てた。成熟した女のすべすべした肌の 上半身があらわれる。ふと おいねは手をとめてこびるように 小首をかしげ、自然丸を見て少し笑つた。そして濡れてくついていた腰まきをとつて、両手をひろげる。

裸身は行灯に照り映えて、陰影に満ち、火の女の塑像のように赤く輝いた。

自然丸の両眼がヒョウのように金色に鋭く光った。

いつだったか、おいねは噴火口に、身を投じた女の話 を 聞いたことがある。煮えたぎる溶岩の坩堝(るつぼ)に、一瞬に全身が溶けてなくなる。それを想像した時、なぜか恐怖とは別の、ふるえるような快感が、背中を走り抜けてゆくのを感じた記憶がある。今、その坩堝に身を投げた女の 燃焼がよみがえつた。それは自分を瞬間の

輝やく死に、溶解させていく恍惚であった。

弾む息の洩れる唇を薄く開いたまま、目を閉じて 女は全身を自然丸に委ねた。

漁期をはずれているその網小屋には、荒波が寄せて返す音が響き、そこは時間はずまつていた。

砂床にあおむけになつてゐる女の細い指先が、砂をはいまわり、床を這いまわり握りしめて かすかにふるえる。指の間から 砂がばらばらと落ちる。突然 手が開いたかと思つと、また砂をかたく握り、しびれるように ふるえたりした。

袖ヶ浦の浜辺は、防風林の太い松が 何百本と並んでいて、潮の響きは、その松林に静かに寄せる。小屋の中は、しなやかな呼吸が交差している。しかし、小屋の外では、ただ轟々という海潮音と、松林に吹きつける 日本海を越えてきた風の音が混じりあい、ひそやかな二人のひめごとを かき消している。

やがて足を閉じ、流れ去つた愉悦のあとの、けだるい想いに 身を任せているうちに、いつとはなく 二人は離れ、無言のまま、それぞれ身づくろいをはじめた。

ふと、おいねの顔をみつめた自然丸の目が、苦しげにまたたいた。おいねは少年の顔を見つめ、両手で少年の頬を包んで、目をのぞきこんで言った。

「若さま。今夜のことは誰にも言つてはなりません。口にしたら、二人は破滅です」。

自然丸はおびえて小さくふるえている。

「ああ、どうしましょう。若さま」

おいねはいとしさにどうしようもなく、再び少年を 抱きすくめ、唇を重ねた。

自然丸は薄眼を開けておいねを見た。閉じたおいねのまぶたは ぴくぴくとふるえ、皮膚には細く青い血管が 縦横に走つてゐる。おいねは自分を見つめている少年に気づき、指先で、少年のまぶたを押さえて また目を閉じた。二人は抱きあつたまま、砂の上に転がり、互いの目を見つめて、またまさぐりあつた。

情事は離れる時を忘れさせる。

気がつくと、小屋の外は いつのまにか月がのぼり、夜が更けていた。

体をはなした自然丸がささやいた。

「おいねさん。先に

帰つて」

「・・・」

「わたしは時刻をず

らして、後から帰る」

「いけません。若さま。そんなことをしたら、かえつて怪しまれます」

「しかし、こんな夜更けに二人で歩いて帰れば」

「昨日まで、二人で仲良く歩いて帰つていたではありませんか」

「しかし、昨日と今では」自然丸はためらつた。

「一回だけという約束でしょう。誰にもわかりはしません。そんな事では、すぐに世間にわかつてしまいますわ。何事もなかつたように、平気で歩かないと」

自然丸は頼りない顔をしておいねを見た。

「あんなことをしたあと、平気な顔で、いらねはしないではないか」

「若さま。そんな気の弱い事では、いねは困ります」

「解った」

「どんなことがあっても、今夜のことは秘密にして、忘れていただかないと」

「やって見る」

少年は不安な目で約束した。

「では一緒に帰りましょう」

「いや、今夜だけは、別々に歩いて・・・観月橋のたもとで落ち合うことにしよう」

長門から萩への往還の大道路に沿って、大きい川が流れていて、江良に入る分れ道には橋がかかっている。観月橋といった。

おいねは、さきに行き、その橋のたもとで、自然丸を待っていた。

やがて自然丸がやってきた。

二人は黙って、橋の上に並んで川の水を見下ろした。

下を流れる川面に、季節はずれの蛍が二匹。チラチラと戯れている。

消えたかと思うと、しばらくは光りが見えない。

目をこらしていると、やっと向こうに、今にも消えそうな、小さい光りがあらわれ、ふわふわと飛んでいく。いかにも頼りない恋の蛍である。

「今夜のことは、すまなかつた」自然丸はぼそりといった。

「いいえ、あの時に、いねがいきなり戸をあけなければ・・・」

もうこともではない。自然丸がもう男としての力を、備えていることに、おいねも想いがいたらなかつた。

「いや、わたしも、おいねさんにあこがれて、今夜のようなことになりたいと」

浜辺からここまで歩きながら考えた自然丸の、苦渋に満ちた告白である。

（昨日まではこの月見橋までの道を、おいねと肩をならべて歩いて、ひとに見られても何ともなかつた。今夜から、離れて別々に歩いてゆかねばならない。）

自然丸はそんなことを考えながら、その蛍を眺めていた。

おいねはそんな彼を横に感じながら、浜辺の短い体験を経て、わかものに脱皮していく苦しい魂を見た。

（今朝までの若さまなら、ばあつと、大声を出して、背中に抱きついて、驚く私を見て、幼い子供のように喜んだ。もうあの屈託のない少年にもどることはない）
と思うと、おいねは、帰らぬ日々が、無性になつかしかった。

それぞれの想いを胸に案じながら、夜の楯杜屋敷に帰りつく。

侍門が、おいねにはなぜか、高い城の門のように、いかめしく思える。

後悔はもはや無駄である。

(旦那さまの寵愛が深ければ深いほど、浜辺のことは二度と許されない)。

元服まえとはいえ、まだまだ少年のあどけなさを 脱していない自然丸の顔を見て、おいねは 後悔の唇を噛んでいた。

その夜、おいねは寝つかれず、布団の中で、寝返りを打ってばかりいては、あけがた近くまで、ため息をついていた。突然、ふすまが開いた。そこにはおいねと同じように、眠れぬ自然丸が立っていた。

「おいね」

「若さま」。

おいねは布団をひろげた。

自然丸は、もぐりこんでおいねにすがりついた。

青春に足を踏み入れる不安に、激しく動揺している彼の姿に、いとしさを押さえきれず、おいねは自然丸を抱きすくめた。

「今夜だけは離さない」。

もう浜辺の誓いはやぶれた。

禁断の実を食べた男女に、今夜だけという弁解は、地獄へのキーワードである。(わたしは地獄に落ちた女だ)おいねはそつ思いながら、少年を強く抱きしめた。

やはり背伸びをしているだけで、まだ少年である。おいねの寝床にきて、急に安まり、やがて 自然丸はすやすやとねむる。

半日の間に起きた急変に耐えられなかったのか、少し熱がある。にもかかわらず、何か楽しい夢を見ているように、かすかにほほえんで、自然丸は眠っている。

数日後、おいねは自然丸の召使として雇い入れたおしまという女にいとまを出した。侍屋敷といっても、部屋はふすまばかりで仕切られていて、別棟で休む女中部屋には、屋敷内での人の動きは、手にとるように、筒ぬけである。今夜だけという夜が、ずるずると続いて、気づかれるのは早い。

おしまは、上目づかいに、ちらとおいねの顔を見あげて、何もいわずに、頭をさげて引き退っていった。

市村清三郎は、ときどきやってきた。しかし彼が座敷に上がると、おいねは必ず自然丸を呼んだ。清三郎はおいねと二人だけになる機会がもうないことを知った。機会が永遠に去ったことを直感して、清三郎の足がだんだん遠のいた。

おいねがとつぜん妊娠した。

すでに正妻に後継ぎが生まれているから、就幸は特に関心がない。生まれたらすぐ寺にやろうという。それ以上の追求はない。おいねはほっとしながらも、はやく自然丸との間をうち切ろうと思っていた。

五章

「ただいま」

久しぶりに長門屋敷に寄った就幸のさしみをつくるために、昼から魚市場に行ったおいねが、屋敷のうら口から帰ってきた。

返事はなく、玄関の方で、はしゃいだ女の声聞きこえている。

就幸に用事がある女なんて、誰だろうかと、おいねは、そつと外から玄関の方へまわって見て、ハツとした。いつかいとまを出したおしまである。いつから、就幸とそんな親しげな間柄になったのか、いかにもなれなれしげに、声高に話している。それも話題はおいねと自然丸のことである。

「お殿さま。おうたがいで、なかつたのですか。」

「なんだと。」

「あれまあ。お忙しいとはいえ、あれほどの仲になっているのを、少しもお気がつかれぬとは。」

「ちつとも気がつかなかった……。」

「何回も、おしまは……。まっ昼前から、元服まえの自然丸さまと、二人だけで、海に行き、小屋で、はだかになつてと……。もっぱら、深川の町の評判でございませぬ。お殿さまのお茶のみ伽ぎでありながら、今ようの女つて、だいたんなものだ……。」

「うかつであつた。あれも元服がちかい。もう色気づいてはいると思つてはいたが・ウム。そうじゃ。腹の子は自然丸の子であろう。そつに違いない。」

就幸は、ときどき寢床の中で、政務を思いだすと、もう中断する自分を、思いだしている。

「そりゃあ。濡れ場を見たわけではありませんよ。でも若さまは、お若くてお元気ですから。」

就幸を見つめるおしまは、就幸の嫉妬を見ぬいている。

「うぬ。ゆるされん。」

「どう。おしなさいませ。」

「重ねて成敗してくれよう。」

「まあ。かりにも弟ごにあたるお殿様のお子。それもお母上は、毛利家のおん血筋証拠もないのに。お言葉がきつすぎるのでは。」

「ええい、うるさい。」

おしまのいう通りである。相手はかんたんには、手のふれられない少年であつた。就幸の目が、血走っている。

「オホホ。たいそうなご立腹で。たんとあの女とお楽しみ遊ばされたことでしょうに。」笑いながら見つめるおしまの目は、おいねと就幸の姿を思い浮かべて、嫉妬が蛇の舌のようにチロチロと燃えていた。「また、あしたからお殿様が、お留守になれるのいいことに、自然丸さまとおいねさまが、このとなりのお部屋で、仲よくお顔をよせあい……。」

「ええい。やめんか。」

「オホホホ。」自分で、何もかも正直に言えとおっしゃっておきながら……。まあ、

おいねさまも、ひとり身をもてあましている女ですもの。」

「ならぬ。ならぬ。ええい。すぐおいねを成敗してくれるわ。」

狂ったように怒る就幸の顔を、おしまは、ぶきみな目で、チラと見て、話題をかえた。

「それよりも旦那さま。こんどはいつ。」

「うむ。そうよな。いずれまた。」

就幸はつわの空である。

「いやです。そんなナマ返事は。」

「なかなか忙しくてな。」

就幸は口ごもる。

「ううん。いやっ。」

おしまは、鼻をならして、就幸に寄りすがり、身をくねらせている様子。

「これこれ。人目もある。いいかげんにしなさい。」

あたりをはばかり就幸は、あわてて、声をひそめた。

おいねが自然丸に、気をとられているうちに、いつのまにか、就幸をたらしこんでいるおしまへの怒りに、頭にカーツと血がのぼり、おいねは足がふるえた。

彼女はそつと台所にもどり、

「ただ今帰りました。」

と大きな声をあげた。

果たして、玄関の方は、シィンとして、

「では、帰りますから、まあ、お邪魔いたしました。」

と、急に他人行儀にもどったおしまの、すました声がして、細い道をツンツンして帰っていく、いまいましげな下駄の音が遠ざかった。

「おいね。」

おくに入った就幸が、座敷からおいねを呼んだ。声がきびしい。

「あい。」

おいねは高い声をあげて返事をした。

「ちよつとここへきてすわれ。」

就幸の声がとがっている。自然丸のことを、あのおしまがどこまでしゃべったのか。おいねは考えながら、まえかけを外して座敷に行く。

男の不品行は問われない。就幸の部屋には、おしまの残り香が、きつくだよっていた

「そこへ座れ。」

就幸はうしろを向いて座っている。

おいねは、おずおずと座った。

就幸は顔だけふりむいて、おいねのおどとした姿をみすえた。

おいねは目をふせた。

(やっぱりの女は。何とということだ。)

と就幸は腹のなかで絶望した。

目をあわせることができず、うつむいて、そわそわしているおいねの態度に、それが現われている。

「そちの腹にいるのは、自然丸の子だな。」

むきなおつて、就幸は短刀直入に問いつめた。

「……。」

いつかはこうなると、予期していたとはいえ、とつぜんの問責に、おいねは、こたえようがなくて、うろたえた。

「わしの子に、こともあろうに、年下の自然丸と乳くりあったのか。」

おいねは唇を噛んで、しばらく黙っていたが、やがて返答をはぐらかした。

「なんのお話でしょうか。」

おいねの視線は、豊のふちをさまよっている。

「なに、知らぬことだと。」

ことばを失って、ぶるぶるふるえる就幸の頬。

おいねは主人の顔を、まともに見ることができず、目を伏せたままである。

「なんと、みだらな。」

おいねは、急にうつぶせた。その背中がふるっている。

「いねは、存じませぬ。」

おいねは声をあげて、ひたすら否定した。情事は現場に踏みこまれぬかぎり、証拠はない。

おしまに負けてたまるもんかという気持ちもあった。

「シラを切る気が。不義の子をはらみおつて。」

就幸はあくまでおしまのことばを信じている様子である。

おいねは顔をあげて言った。

「いったい、なんの証拠があつて、そんなことを……。」

これはほんねである。そしておいね自身の悩みでもあった。腹の子は、就幸のものとは断言はできぬ。しかし、自然丸のものとも限らないはずである。

就幸はぐつとつまった。

「証拠だと。しらじらしい声を出すな。」

鼻じろんだ就幸は、立ちあがって、背を向けた。ふと、おしまの意地悪いまなざしを思い出して、疑念が胸をよこぎる。おしまにだまされたのかも知れぬと思った。

「お前に言いたいことがあるば、言つて見い。」

おいねのいい分も、聞いてやらねばならぬとも思う。就幸は政務に立つ武士であった。

おいねはその就幸に、はらはらと涙を流した。ふだん、弟元周の政務まで引きつけて、みごとに本藩の職務もやっけてのけている就幸に、おいねは、夫として最大の尊敬を払っている。それは信仰に近いものであった。今もその気持ちに全然変わりはしない。

あれからも、自然丸とはときどき、床を重ねてはいる。これほど愚かなことはない。

うつむくおいねの頬に涙がこぼれた。

瞬間、おいねの頬が鳴った。

「ばかもの。涙でこの就幸の心が、とろけるとでも思っているのか。」

太い声がふるえて、おいねの胸をうった。それはおいねを愛んでいた男の、かなしみがこめられていた。

「これほど旦那さまを、おしたい申ししておりますのに。いったい何といえよ。」

自分のことばにいつわりはない。しかし自然丸との関係もまた、あらためて己れに問えば、愛しさとか、いいようがない。けれども、それは死んでも、口にすべきことではない。おいねは必死に、就幸にとりすがろうとした。

「ええい。そばに寄るな。」

困惑に冷静さを失い、あたまが混乱してしまった就幸は、おいねをはねのけて、けりとばした。いきなり蹴られて、おいねは畳の上にごろがった。(旦那さまは混乱している)。転がりながらも、おいねは直感した。

「旦那さま。」

起き上がれぬほど、蹴られたところが痛みながら、おいねは、就幸にけんめいに叫んだ。

「なんじゃ。居なあったのか。くそっ」。おいねの背中で、今度は刀のさやが数回鳴った。あまりの痛さに、おいねは息がつまり、失神してあおむけに転がった。

「どうせ、母親が亭主の弟とつるんでできた女。梶杜家にたたりを持ちこむ性悪女。死ね。」

(結局、これだ。なにかあると、産まれた時のいきさつにまで、さかのぼって、責められるのだ)。おいねは、死ねという声を、かすかに耳の遠くで聞いていた。(そうだ死のう。私を愛した男が二人いる。わたしが死ねばいい。)たしかに、母親の姦通ゆえに生まれ、父の愛に飢えた半生であった。だから、父親のような就幸を、したいながらも、その甥にまで心をつつし、身を与えてしまった。おいねは死のうと思った。

「死にます。死なせてください」

おいねは口走った。

ギョツとしたように、就幸のおう打がとまった。

「なんだと。」

「わたしは、旦那さまにかあいがられました。いねはいつ死んでも悔いは残りません。」

起き上がり、手をついて、肩を落として泣くおいねを見ながら、就幸の顔は、絶望にゆがんでいた。

おいねと自然丸は、この屋敷で、たった二人だけで暮らしている。当事者の二人が、口を閉ざしてしまえば、情事の秘密は、永遠にしかも誰にもわからない。それはいつの時代でも、同じである。

疑えばきりが無い。さりとて、おしまの話もまんざら嘘とは思えない。おいねの態度にも、信じられないなにかが感じられる。

就幸は、逆上したものの、立ったまま、どうしようもない立場に、おいこまれてしまった自分にくるしんだ。

おいねに自殺されては、ほまれを重んじる武門の恥になる。

鞘（さや）で、おいねをなぐっていた刀を投げすてて、就幸はうめいた。

「やはり自然丸は、生まれた時に、命を断つべきであった。」

お家と主君こそ第一と、ひたすらまじめにいきてきた就幸にとって、身におぼえない不運というほかない事件であった。

おいねは正妻ではない上に、自分の養子先、志道家の家女である。

自然丸は、弟梶杜元周の子とはいえ、長府藩家老の次男である。こんなことが公けになれば、両家のお取りつぶしは目に見えている。

就幸はひとりで苦しみ、城中の侍たちが、何か萩藩にむつかしいことが起きたらしいと、ひそひそと、陰で心配してささやくほど、頬がげっそりとやつれた。

深川の町はせまい。腹が大きくなつたおいねが通ると、人々がうわさをした。

・・・あれは自然丸さまと乳くりあつてできた子らしい。

・・・あのおいねさんは、父親の弟が母親の寢床に、忍び入つてできた女らしい。いんらんじゃ。

・・・まあ、いやらしい。では、あの腹の子は、元服まえの若さまのお子か。

・・・そうでないという証拠も何もない。しかし、めつたなことを口にしてはいかんよ。

こうなると、みなと小町の評判は、裏目である。噂は、いったんひろがりだすと、枯れ草の野原に、火をはなつようなもので、嫉妬とともに燃えひろがつて、手がつけられなくなり、おいねの背徳は、町では今や、公然の事実のように、語られている。このままで置くわけにはゆかない。

自然丸は、元服のためという理由で、長府屋敷に帰し、おいねの身がらは、梶杜家の墓地がある泰栄寺に預けられ、そこで産み月を待った。噂で左右されるわけにはゆかない。あくまで志道就幸の子として、生ませるのがたてまえである。女が養子先の志道家につながっているから、就幸はしまつを自分の実家の梶杜家の手に委ねた。

梶杜家の菩提寺が、おいねに与えられた住み家であった。

長門屋敷を去る日があった。おいねの部屋たたみがとりかえられる。

おいねは、さいごの思い出にと、この間までの自分の部屋に立ちよつた。女がその部屋でたたみ職人のさしずをしていた。

おいねのけはいに、その女がふりかえつた。おいねはうめいた。それはおしまであった。

六 章

自然丸の耳もとを、すさまじい風が走りぬける。長府屋敷に、つないであつたはだ

か馬に飛びのって、たてがみをつかんでいる自然丸は、おいねのいる泰栄寺をめざして、馬を走らせている。

おいねの命が危ない。少年には、大人の世界のしがらみはわからない。しかし、少年の胸に刻まれたおいねの愛は、出生そのものを不吉といわれ、のけものにされていった孤独な少年の魂を、はじめて包んだやさしい人肌の、ぬくもりであった。

長府の梶木屋敷では、議論がふつとつしていた。

元服前の自然丸を非難するものは、誰もいない。侍たちの攻撃はすべて、おいねに向けられている。

・・・めんどろを見てくださる就幸さまの、大恩をふみにじっておいて

・・・とはも行かぬ自然丸どのを、たぶらかしおったいんらん女め

・・・だが、腹の子は、はたしてどちらの殿の子なのか。

おいねの腹にいる胎児が、もし男として誕生したばあい、やがて四千石の大身になる自然丸こと、梶屋主殿守広品の子になるのか、それとも本藩家老志道就幸の子としてあつかわれるべきか。侍たちはここになると、重い沈黙に至った。

侍たちにとって、まずは自分が仕える主家が第一である。

わけのわからぬ存在の、幼い児が増えるのは、迷惑せんばんな話である。

・・・斬れ、斬ってしまえ。女を生かしておくとお家が乱れるもことになる。

・・・そうだ。斬ろう。子が腹にいるうちに女を斬れば、わざわいはすべてなくなる。

家長は、侍たちのこの議論を知っていて、聞こえぬふりをよそおっている。この種の事件は、世間の事情につうじた家来たちが、万事をのみこんで、殿様のために、一番良いように、秘密裡にしまつていく。それは殿の身分を保全するためであり、同時に家来ひとりひとりの地位を守り、ひいては、個々の侍の家庭をも、守ることなのだ。それこそが、忠義なのである。このばあい、家来としてどうするのが、真の忠義の道なのか。そういう無言の期待を受けての議論である。

話題は、すでに暗殺者の人選にはいつている。

だが侍たちは、さすがに背徳の女の血で、自分の刀をけがすのを誰も好まない。総論の場では、斬りとなったものの、さて現実の問題として、誰が斬るのかということになると、誰もそつとその場をはずれていくのである。

こういう議論のくりかえしが続くと、どこかの藩にも、短気な侍の一人や二人がいて、事態が進まないのに、いらいらして、斬りすて役を買って出るものだ。内心それを誰も待っている。現に「××が斬るらしい」「いや。斬るなら、○○だろう。あの人は、もともと殿にご恩がある」とか、いろんな人事にからんだ人選 の話題が出ている。もはや斬るのは確定的という空気になっていた。

(おいねさんが危ない。)陰で、じっとそれを聞いている 自然丸の想いは、泰栄寺にいるおいねに まっすぐ向けられていた。

自然丸をのせた馬は、長府から田舎道を一路、砂けむりをあげて、内日村に向かって走っている。

大きな道の右側の山手に、こんもりとした杉林が見え、その林のなかに、寺の屋根が見えかくれする。泰栄寺である。

石段のしたに、馬をとめ、自然丸がおりようとしていると、中からおいねが走りよってきて、自然丸にかじりついて、声をあげて泣いた。

「もう、会いにきていただけはしないとばかり、思っていました。」

わずか数ヶ月の間に、見ちがえるように、たくましくなった自然丸を見て、おいねは、自然丸の胸に顔を埋めて、ただ泣いた。

やがて自然丸は言う。

「おいねさん。近くといっても、五里（二十キロ）はあるが、そこに保護寺神上寺がある。俗にいう逃げ込み寺だ。今夜、そこへ逃げなさい」

と、身の置き場のないおいねを見つめながら、逃亡をすすめた。

そこから神上寺まで、約二十キロの道のりは、けものみちである。

やぶの中で、道は網の目のようにわかれている。

一步、道をまちがえると、山の中を、ウロウロと迷わされ、出られなくなる。ふだんは、けだもの以外は、だれも通らない。彼は駆遣の馬子たちに、おいねの逃亡の手助けを頼んだという。野良ばえの若の頼みならと、馬子たちが侠気に燃えた。ただし、追う待にはれると、駆遣がお取りつぶしになる。夜なら、わからぬように、おいねの通る道のさきさきで、案内をしようということにしたという。

自然丸のことばに、おいねはうなずいた。

自然丸は、先に神上寺に行き、木川という寺侍に頼んでおくという。

神上寺のある山は、長府屋敷で育った若殿自然丸が幼い日、夏になると、カブトムシをとりにいった寺である。中腹にお成門という大きな門があり、そこには殿様専用の茶室もある。カブトムシを追い、夢中になり、遅くなった時は、ないしょで、この宿舎によく泊めてくれた。自然丸にとっては、この保護寺は親類のように親しい。

「善はいそげだ。きまったら、今夜のうちに逃げなさい。やぶの中の道案内はこれだ」。

自然丸は唇に両手をあてて「ホー、ホー」と、ふくろうの鳴くまねをして笑った。

「おいねさんの、ゆくさきさきのやぶで、この声をする。おいねさんは一人のように思えても、けっして一人ではない。」

何の見通しもない逃亡であるのに、こういう計画に 熱中している自然丸の顔は、いかにも楽天的であかるかった。

おいねは、そのあかるさに、賭けてみようと思った。

野性のカンは鋭い。自然丸の予感、みごとに的中していた。

自然丸が馬で長府屋敷を出たあと、屋敷では、誰からともなく言いだして、ついにおいねを斬る暗殺団が、その夜、出発することに決定されていた。

人気の少ない村に、タヤミがおりて、とつぷりと暗い夜が、内日村を黒一色で塗りこめている。

寺のうしろの山々は、墨で描いたように、空にただ黒々とそびえている。

昼間は寺の下のほうに、何軒か見える農家も、夜はとぼとぼと燃える いろりの火のまわりに、家族が寄りあい、わらじづくりなどにいそしむ。だから外からは、灯はほとんど見えない。ただ、暗やみだけが村を支配していた。

「ホーホー」

ふくろの鳴き声が、裏山で聞こえた。

「ホーロ、ロ、ロ、ロ」

もう一度、寺のすぐそばで鳴いた。

寺の周囲を、手さげちようちんを持った黒装束の群れが、とりかこんだ。

暗殺者たちである。

一人がおいねがっている部屋を示した。

ちようちんの灯が、いつせいに吹き消された。

暗殺者たちは手はずをととのえ、静かにその部屋を取りまいた。一人が音もなく、ヒラリと、縁がわに飛びあがった。そして部屋のまわりに伏せる仲間、合図をしたあと、刀を抜いて、半身に構え、部屋のふすまを蹴りあげて飛びこむ。部屋のまん中には、布団が敷いてあり、人のかたちにくらんでいる。

そのふくらみのそばに立ち、鋭く光る切っさきを 下に向けた刀の柄を、右手で逆手に持ち、左手でさっと、かけぶとんをめくる。めくるのと、刀の切っさきがそこをグサリと刺す動作が、無言のうちに一瞬に行なわれた。刀は空をつらぬき、下ぶとんを刺した。もぬけのからであった。

(用を足しに出たのか)。暗殺者はあたりを見まわして、暗やみに耳を凝らした。しいんとしている。

女の歩く足音も、廁(かわや)で、小用を足す音もしない。

彼はふとんに頬をつけた。

「ちいっ」

人はだのぬくもりがない。(しまった。)彼はヒラリと、縁がわの外に飛び下りて、片手で丸い輪を描いて、指をかなたにさして見せた。ターゲットが逃げたという手信号である。

黒装束たちは、寺の縁の下に集まる。逃亡者を追せきするためである。

この寺から下手に行く道が一つある。

それは馬関に通じていて、その先には九州がある。

寺の上には、山陽のここから、山陰の日本海沿岸に抜け出る道もある。長門の楯小屋敷に至る道である。

もうひとつは、けものたちの通るやぶの中の道だ。まっくらの夜のやみの中を、女が抜けるには、あまりにも複雑に錯綜(さくそう)している。しかし、これは保護寺神上寺に抜けられる。

暗殺者の集団は冷静である。一部は馬関方面、一部は山陰長門方面へ、そして残り、やはり、そのけものみちに、手わけをして、音もなくすばやく、それぞれが分かれて走っていく。

彼らが去つたあととは、まったく何事もなかったように、静まりかえつた寺と山々が、夜のとばりの下で、ひっそりとしていた。

「……もつ、どれぐらい走つただろうか。

まっくらなやぶの中を、おいねは走る。歩くつもりであるが、足もとは見えないうえに、まわりはやぶである。ただ自分の足音だけが、やたらにガサガサとひびくから、胸がどきどきして、自然に走ってしまつ。

「ホロロ。」

ふくろつうの声は正確である。ところどころのやぶに、馬子たちが隠れているらしい。駅通に働く彼らわかものも、また雇われる身である。暗殺者の侍と、どこで鉢あわせするかもしれぬこの争いには、正体はいつさい見せられない。

疲れの感覚がまひしたように、おいねはときどきつまづいては、また起き上がって歩いていく。

道といつても、けもの道は、巾は五十センチもない。ただ、背たけほどもあるやぶの中を、けものたちがここを歩いて、自然に踏みかためたというだけのものである。

おいねの両足は、笹ですれて、傷だらけになっているし、うっそうとしたやぶをかきわけるときに、両腕は、木の枝や笹の葉で、切り傷だらけになり、あちこちに血が流れ出ている。

よろよろしながら歩く、そんな細いおいねを、はげますように、ふくろつうの音が、向こうの行く手から、おいねをさそつ。

ふと、ふくろつうの鳴き声が、ピタリとやんだ。

はるか山の下の方だが、ガサガサとやぶをかきわけける音がして、ちようちんの灯が、チラチラしている。

暗殺者たちである。

「おい、あつちだ。あつちでなにか音がしている。」

小さく叫んでいる。

(見つかった。ああ、どうしよう)

おいねは身内が、凍るような気がしてしゃがんだ。やがて、足音は、だんだん遠のいてゆく。

やぶに潜んでいた別の馬子が、反対側の方に音を立てて、暗殺者たちを、そつちへ誘導したらしい。しかし、暗殺者を見た以上、もつ安心はできぬ。彼らは保護寺の入り口に、先まわりして、待ちぶせするに違いない。

急がねばならぬ。

すぐそばのやぶで、ガサツと音がした。おいねは飛びあがった。

ふくろつうが小さく鳴く。(急げ)といっている。

おいねは妊娠七ヶ月の腹を、いたわるように抱え、ふらふらと立ち上がった。

あちこちの藪の小枝に、ひっかかって、ほつれては、かきあげていた長い黒髪は、汗で濡れてほどけ、さんばらになり、乱れて、おいねの顔や半身をおおっている。

走るおいねの肩は 左右に揺れ、あえぐ息が 火のように熱い。まるで池の中からあがってきたように、着物は汗でぐっしょりと濡れている。

ハツ、ハツと、のどから出る息の音が、あたりの暗やみにひびく。やぶには いつ終わるともない山道が、まっくらな夜の中を続いている。

「しばらく、休ませて」。

おいねは、小さい声で、ふくろつがいる向こうの暗やみに 投げ出すようにささやいた。

ふくろつの声が止まった。

おいねはそばの道ばたに、全身を投げだして あおむけになり、顔をぶるぶるとふった。流れる汗があたりを散る。妊娠しているから、呼吸はすべて肩に集まり、はあはあと吐く息で、乳房が大きく揺れている。

上を見あげると、月はないが、黒い木々の枝の間から、星がたくさん出ているのが見えた。

「ああ、お星さまが。」

おいねは目をつむった。

ずうんと地底にひきこむような 倦怠感が襲った。

おいねはうつうつと眠りかけている。

夢の中で、自然丸があかるい笑顔で、袖ヶ浦の海べを走っている。

（若さまあ

）おいねは呼んだ。

松の林の下で、おいねは自然丸に追いついた。自然丸はふりむかない。

（若さまあ

）と、おいねは泣きそつになり、もう一度叫んだ。

耳もとで、鋭くふくろつが鳴いた。

おいねはハツとして目をさました。

「夢か」

とつぶやいて、あたりの暗がりを見まわした。

行かねばならぬ。

体は綿のようにつかれきって、足が痛い。

おいねは、ふくろつが鳴く方を、まるでのろつのように、ギロリとにらんで、よろめきながら立ちあがった。

女はもはや、暗やみにうごめく幽鬼であった。小そでも着物も、その下の皮膚も、やぶの小枝に引っかかかき、スタスタに切れ、血が吹きだして、白肌をつたい、何本も血の筋になり、たらたらと流れている。

おいねは、時にはおいおいと大声で泣き、時には歯をくいしばり、泣き声をころして走る。

着物は破れ、ぼろのように垂れさがり、ばらばらにほどけた黒髪を、口のはしにくわえている。

目がつりあがり、顔といわず、胸といわず、足といわず、傷だらけの皮膚からは、血がしたたる。

それはふた目とは見られぬ、顔をそむけたくなるような、おぞましい姿であった。いつまでも、逃げおおせられるはずもない。腹の子を生んだ後に、待ちうけているのは、殺害か自殺しかない。それはおいね自身が、一番よく知っている。しかし、この道をひた走りに走った。

この腹の子だけは、生んでおかねばならぬ。

まさか、この腹の子が、将来、天才作家近松門左衛門になるうなどは、女は夢にも思っておよばなかった。

それは、ただ本能の予感であった。産んでおけば、いつか、何かが、誰かにわかってもらえる日がある。ただそう信じればこそ、真夜中の暗やみの中、このうねうねした、二十数キ口におよぶ道を、女は歯をくいしばって、走りつづけた。やがて元祿にいたるこの泰平の世が、支配者にとって、どうであったかは別にして、逃走だけが、最後に残されたこの女の、はじめて得た哀しい自由であった。

夜が白む前、おいねは、やっと豊田の保護寺の、入り口の山門の下の階段に、たどりついた。しかし頼みの神上寺は、そこからは、階段の上の山門をくくり、さらに見上げるほど向こうの、何百段を数える階段の、はるか上にある山寺であった。

もはや、階段をのぼる気力はない。かけこみ寺は、わらじを投げて、そのわらじが敷地に入れば、それでも手を出すことはできないとされている。

斬られてもいい。せめて山門の向こうに、わらじを投げこんで、自然丸に、自分がここまで来た身の証しを、残しておきたい。おいねはそう思って足を見た。すでにわらじは破れて、素足で歩いていた。追っ手の様子では、もう帯をといても、間に合わぬ。かんざしをとろうと、髪に手をやるが、髪はほどけて、かんざしはない。絶望的な目で、おいねは、うしろをふりかえった。刺客の提灯が、向こうからこちらに迫っている。

「ああ。一足早かったのに。」

おいねは、そこにへたへたとくずれふせながら、やぶの向こうから、迫ってくる刺客たちのひたひたという足音を聞いていた。

七章

ふくろつもの鳴き声が、一だんと激しく、やしろの森にひびいた。

そのふくろつもの声をききつけたのか、むこうから、息せききって、かけてくる別の侍の下駄の音がした。

下駄の音は、ふせている、おいねの頭のそばでとまった。

「おいねさんが。よかった。私は寺侍の木川だ。まにあってよかった。さあ、私の家で休みなさい。」

おいねがもつろつとした目で 見上げれば、寺にあがる階段の、門前にある家の、

寺侍である。

おいねは自然丸のことはを思いだして叫んだ。

「追われております。救けて。」

「おう。聞いておるぞ。」

抱きかかえられるようにして、大急ぎで、女は山門わきの道ばたの、木川の家に通びこまれようとする。

「待て。」

人目につかぬよう

に斬れという密命を受けて、まるでクモのような黒装束に、目だけ出した身なりで、逃亡者を追ってきた刺客たちが、ゆく手をさえぎり、木川とおいねを、半円形にとりまいて、いつせいに、白刃を抜きはなつた。

道の右がわには、低い石垣が続いている。ジリッジリッと、その方においねを寄せながら、木川は白刃の数を数えた。

六本ある。木川は下駄を脱いだ。

相手たちの刀から目をはなさず、木川はおいねに言った。

「安心めされい、お女中。ここは保護寺神上寺の寺侍木川の家じゃ。よつて神上寺に逃げこんだと同じことじゃ。神上寺が預かった以上、もはや誰も指一本ふれさせるわけにはゆかない。」

そして、腰の大刀を抜いて、正眼にかまえ、とりかこんだ覆面たちに、静かに言った。

「おのおのがた。この掟をおかすのなら、木川が藩公から拝領した、この来国貞の銘刀でお相手しよう。寺社奉行配下の寺侍を、相手にするものは、すなわち、藩公にさからうもの。いかがかな。」

そのことはが終わらぬうちに、左正面から、一本の白刃が襲いかかった。

正面からは、もう一つの白刃がひらめく。

おいねを石垣のそばに立たせて、身を低くかわした木川の刀は、左正面からおりてくる刀を、下からチーンとはねとばしておいて、輪を描くように、正面から斬りかかるもうひとつの影の右肩に、ななめに振りおろしていた。

布をはたくような、鈍い音がして

「うつつ」

とうめく声が出した時は、右正面から、おいねの背中めがけて、ほかの影が、刀を振りあげている。

一瞬、木川の体が大地を蹴って、風のように舞い上がり、石垣の上に立つかとみえた。

木川の来国貞は、舞い上がりながら、その黒い影の刀を、横になぎはらい、同時に、左ななめ正面から、木川の足をねらって、横に斬ってきた四人目の肩を、上から、ズウンとたたいている。

二人の刀をはねとばし、もう二人を斬るのに、三秒もかからぬ、まばたきをする間

の早わざである。

瞬時の間に、カチツ、チーンと、二本の刀が、音を立てて、一本は数メートル左脇の小川に、一本は石垣の上の草むらに、飛んで落ちた。

刀をたたき飛ばされた二つの影は、あわてて小刀を抜いて構えているが、ろうばいは隠せない。

肩を斬られたもう二人は、うめいて地に倒れている。

再びヒラリと、道に降り立った木川は、息も乱れず、石垣に身を寄せるおいねを、背にかばい、残る二人の影に、正眼の構えにもどっていた。

相手の刀がかすつたらしく、木川のひたいからも、血が一筋、スツと左のまぶたの上から頬を伝って、えりもとに流れている。

大刀を構える黒い影は、あと二人しかない。暗殺者たちは、隊形を再びととのえている。

大刀をおとされ、小刀にかえた二人は、道の真ん中に出てしまった木川の、両わきにまわる。

二本の大刀は、木川の前うしろにわかれ、左右と正面と背中から、四人が同時に襲う態勢をとり、間あいをつめ、ジリジリとせまっている。

(だめだ。助けにきてくれたお侍が斬られる。)

絶望したおいねは、目をかたくつむった。

とつぜん 木川が口を開いた。

「斬られたお二人は、肩先を浅く斬ってあります。死体を残しますと、藩公のおきてに背いたあるじの楯杜家のお名前が、表てに出て、お家はお取り潰しになりますから」

木川はあくまで、冷静であった。

だが、そのことばの重い意味に、黒い影が たじろいでいるのがうかがわれた。

正面の影が、急に刀を引いて、うしろに退がった。

背後から迫っていた影は動きをとめ、両わきのふたりも小刀をおろした。

殺気を失っている。

「引かしてもらいたい。倒れた二人を連れて帰りたいが、ご無礼の段、見逃してもらのか。」

つぶやくように、低い声でたずねている。

寺侍として、何回もこういう修羅場に直面してきた木川は慣れている、来国貞を構えたまま、かたち通り答える。

「万事承知。そうするがいいですよ。あんた方だけじゃない。この寺に駆けこむ者を追う人は、誰でもおきてを忘れて狂う。殺生はこの際、むだだ。」

「すまぬ。ではご好意に甘えさせてください」

四人の影が、それぞれに、刀をおさめるのを見とどけて、木川はゆっくりと大刀をさやにおさめた。

「さあ。お女中。こちらに参られい。」

ひたいから流れる血を、そででぬくしながら、おいねをとめない、木川は石垣の向

こうからあがる家の 入口のほうに歩いた。

ふりかえると、四人の影は、倒れた二人を、両方から抱えるようにして、しょんぼりとして、トボトボと道を引きあげていく。

木川はそれを見送りながら、おいねに笑いかけた。

「やれやれ、この神上寺のご門番ときたら、命がいくつあっても、足りやせんわい。天下泰平というのに、今だに血刀を振りまわすのは、このわしくらいのもんじゃ。あの六本の刀に取り巻かれた時は、こりゃあ。安いお給金じゃ、もう引きにあわん。今度、寺社奉行さまに申し出て、お給金を倍にしてもらおうと決めた。わしゃ、こりゃあ、キユウリ膾（なます）のように、切り刻まれると、きんたまが縮みあがったわい。……。お女中。これで安心。心静かに養生され、よいお子を産みや。」

たった今、目の前にくりひろげた死闘を、終えたばかりというのに、まじめな顔で、本気とも冗談ともつかぬ、不敵なことばを言いはなつ木川に、つられてほほ笑みながら、これで救われたのだ、という安どの気持ちだが、おいねの気をゆるめた。

今でも、数百にのぼる石仏が、一番下の山門から山頂まで、ズラリと並ぶ神上寺の長い長い石段に、木川の石仏は、最上段に位置して座している。

藩公のお成り門をあずかる保護寺の山門は、寺社奉行の管轄であり、寺侍の権威は、すなわち藩公の権威であった。

「ありがとうございます。あの……自然丸どのは
どうなるのかと、息をひそめて、一部しじゅうを、見守っていたのだらう。

暗やみの中から、山の向こうの方へ去っていく、あかるいふくろうの鳴き声が響いた。

その方角をながめながら、木川はニツコリと笑った。

「昼間から連絡を受けていましたよ。自然丸どには、あんたを私がおあずかりすると申しあげている。」

家の中に運びこまれたおいねは、気丈な木川の妻に、絞った手ぬぐいで、全身の血をふいてもらい、あちこちの傷に、ハミ焼酎をすりこんでもらっていた。

「なんとまあ。体中が傷だらけじゃのう。この体で、夜のあのけもの道は、わしら男でもよう走らんわい。」

拝領の来国貞に、刃こぼれがないか、明かりにすかして、調べていた木川は、ふりかえって、傷だらけのおいねの全身を、しげしげと見ながら、感動したように、つぶやいた。

ほうたいのかわりに、手ぬぐいを、ひたいにまいている。

「あんたは、あつちを向いて、座つとらんじゃ。男がものめずらしそうに、はだかの女のどこやらを、シロシロと見るもんじゃないよ。あそこなら、わたしのを見なれちよろうに。ねえ。おいねさん。」

妻にどなられて、木川は、苦笑して、首をすくめて、体をあちらを向いて、刀を灯にすかして眺めている。

「けんどもあ。亭主の言つ通りですよ。ようまあ、夜の夜中にあの道を越えて。」

ぼくとつな木川の妻は、おいねにはやさしい。

「道案内たちのお陰でした」

「ほう。道案内たちとは」

「それは」言いかけたおいねは、木川の鋭い制止の視線にあい、口をつぐんだ。
「申しあげるわけには、いかないのです」

駅通で働くわかものたちのことは、相手が木川の妻といえども、洩らしてはならぬ。

まっくらな、あちこちのやぶに立って、暗殺者をよそに誘導し、おいねを神上寺に、誘導したわかものたちは、おいねが無事に助かったのを見とどけ、さわやかに笑って、夜のけものみちを、長門駅通の詰め所に、帰っていったのであろう。報しゅうはおるか、そのてがらを、みとめられることさえ、彼らは求めなかった。

そのやさしい思いやりを、おいねは、暗やみの向こうに、じっとかみしめていた。

「よほど、ええ案内人でありましたでしょうね。はい。この着物は地味じゃけど、しばらくがまんしてな。そうそう。その案内の人たちのためにも、丈夫なややを産まんにゃ」

自分の地味な着物を着せながら、木川の妻は、笑っておいねをはげました。

「あい」

おいねは、ただ、うなずくだけである。

あらかじめ事情をきいていた木川は、女房にせかされて、翌日から、子を産むこのおいねのために、山門のよこの草原に、にわかづくりのお産小屋をつくった。

やがて、にわか屋敷ができあがるころ、寺侍木川のうしろ姿を、おがむように手をあわせ、おいねは産室に入った。

このときを待ちかねたように、まもなく陣痛のつめき声が、お産屋敷の中から、間断なく続く。おいねが平馬、のちの近松門左衛門を産んだその夜は、血のように真っ赤な色をした三日月が、中空にのぼり、村人たちは、それを見て、天変地異かとおびえ、雨戸を閉ざしたという。

産室からは、銀の鈴をふるような 産ぶ声がひびいた。

おいねは二人の命の恩人の木川に、あらかじめ命名を頼んであった。

男の子と聞いて、木川は喜んで、木川家に代々伝わる 平という一字を与え、平馬という名前をつけた。

あれから交代で、やぶの中に、毎晩ひそんで、監視して、おいねが男の子を産んだことを 見とどけた暗殺者たちは、次の指示をおおぐため、ひそかにそこを引きあげた。

今は写真だけ現存しているが、おいねが平馬を産んだ家は、近松屋敷として、神上寺山門わきの草原に、ごく最近まで、白壁の小さな建造物があった。

おいねは結局、逃散とされた。

もともと正妻ではない。

はした女の逃亡として処理され、人別帳から外されてしまふのである。

もはや、どこで野たれ死にをしようが、公けの場では、はじめから この世に存在しないものとして、取り扱われるのである。

貧しくはあるが、母と子の二人だけの、ささやかな日々がはじまる。

すぐ近くには、毛利元就の九男で、キリタン大名の、毛利秀包の長男 フランシスコ毛利元鎮がくらしている。

その母親マジエンシヤ引地の君は、日本史にキリシタン大名として名をとどめる大友宗麟の娘である。元鎮はキリシタン禁教とともに、大名の身を引いて、家老の松村伝之進を連れ、柳庵と称して、花鳥風月の日々を楽しんでいる。

伯父毛利輝元より 一万石の加増の話があったが、非戦と弱き民への慈愛は、キリシタン信仰。病弱をたてに、それを断ってしまい、甘んじて野にくらすという、腹のすわった生きざまをしている。

「この世に生まれたは、父なる神のみ心じゃ。のう平馬よ。」

広品の子なら、この子の祖母は、防府毛利家の女になる。

柳庵には、他人ことではない。母の引き地の君も世を去り、天を仰いで祈る柳庵は、そういつては、わが孫のように、平馬の頭をなげるのだった。

八章

あるとき、木川の家の前の屋敷に、暮らしているおいねのところに、楢杜の使いと称する小者がきた。就幸が内密な用事があるから、そつと抜けだして、自分が連れていく先まで同行せよという。

おいねは、それを聞いて、鏡の前で、長い間身づくろいをして、置き手紙と、楢杜の家紋のついた品物を、鏡台のそばにそろえた。そして、殿居というところの柳庵の家に、遊びに行っている平馬に、会いに行つた。

あどけない平馬は、木屋川の浅瀬の流れに、尻をからげた柳庵とともに、チンポコを出したまま、無心に魚をすくっている。

おいねは、しばらくその平馬の姿を、じつと見つめていたが、やがて、キツとした顔で出かけていった。

それから数日。おいねは帰らない。

どこかへつれ去られたのである。

村人はいろいろとうわさをしたが、どこへ連れていかれたのか、見当もつかなかった。

おいねは、案内にきた小者に連れられて、山の中をまる二日間歩いた。

あちこちの山道を、ずつとのぼりながら歩くと、突然、そこから上は、視界がひらけて、空だけしかなくなる。そこは、中国山脈の、とある山の山頂である。

そこだけが、たたみ三十枚くらいの空き地になり、きちんと手入れされているが、

一面に落ち葉が、散りしっていて、その上に、ごぎが一枚ひろげられている。空き地のそばには、小さな地藏尊が建てられている。

下を見おろせば、すそ野にかけて、静かな林が続いているが、おいねの周囲に立つ木々の、むこうに見えるのは、雲の下に、走馬の群れのように走る山脈の、山々の頂きばかりである。

その上を渡る風は、山あいを吹くそれではなく、陸地の全体を見おろして、雲をかしている風である。

さえぎるもののない空を、風はただ、ひゅうひゅうと、音を立てて渡っている。ずい分、高いところへ連れて来られたと、おいねは思った。

空き地には、就幸らしいふく面をした侍が、ひとりで待っていた。

連れてきた者のたもとに、小判らしきものが渡され、ふく面の侍は帰れと手で合図する。むろん、あたりに他に人はいない。

小者は無言のうちに、人さし指を突き出して、刀をにぎる手の形をつくり、上からななめに振りおろす。処刑の動作を見せて、ヘラヘラと笑った。そして、おじぎをして、ふりかえりもせずに、山を降りていく。

ここは処刑場であった。

ついに、おいねが棺柩就幸の手で、斬られる日がきた。

地藏尊は斬られた死者の、めい福を祈って、建てられているのである。

おいねは、顔が青ざめてこわばった。しかし、平馬を生んだ日から、自分がうらぎった主人就幸の手によって、斬られる時がくることを、心のすみのどこかで、待ちのぞんでもいた。

・・・今日までの、いのちであったのか。

おいねは、自分の胸が、冷たくなっていくのがよくわかった。

「おいねか。」

ふく面の侍はそういった。

声は就幸ではない。

あつと思つた。

どこかで聞いた声であつたが、思い出すゆとりは、おいねにはなかった。

「はい。いねでございます。」

おいねは悪びれなかった。

「ひさしぶりじやのう。わしが、お前を斬る役を買つて出た。」

侍はふく面をとった。

「ああ。」

おいねは青ざめた。

だまされたのである。

ふく面の下は、かつてしつこく、おいねに迫つた市村清三郎であった。

おいねは、あたりに、就幸の姿を探した。

「就幸どのの話はうそじや。私がおまえの命を、金を出して買ったんどのう。」

ゾツとするような、冷たい目であった。

「お金を渡されたのは、いま、見ました」。

「ただし、女としてではない。すえもの斬りの材料として買った。ふん。就幸どのの甥ごにすりよったのか。おまえのわがままゆえに、就幸どのがどれほど苦しまれたか、おまえにはわかるまい。斬りするのさえ、けがらわしいが、特別ななさけをもって、私の刀のさびにしてやる。きれいに死にたいだろうが、そうはいかんのう。お前が死んだあとは、すえもの斬りの腕だめに、スタスタに切りきざむことになる……。」

死を覚悟してきたとはいえ、そのことは、おいねの心臓は凍りついた。

「そのござに、うしろを向いて正座せい。」

おいねは、ござの上に正座しようとした。しかし、両ひざがブルブルと、大きくふるえ、今にも大声をあげそうな衝動が、体中をめぐる。

恐怖で、のどから洩れる息が、カスカスと、かすれた音をたてるが、ことばにならず、おいねは、ただ、すがりつくようなまなざしで、清三郎の顔を見あげた。

その顔を見て、ニヤリと笑った清三郎は、なわを、おいねの胸に十文字にかけて、うしろにまわし、両手をつしる手にくりあげた。

罪人の首をはねる時は、まず、うしろ手にくりあげ、うつむいて正座させる。

次に、うしろにまわり、正座で重ねた両足の親ゆびを、動かぬように、強く踏んでおいて、背中をドンと突く。

両親ゆびをしつかりと踏みつけられているから、思わず腰が浮いて、身体が空中に泳いで、その拍子に、前にあごを突きだしてしまふ。

その瞬間、いっばいにのびている首筋めがけて、刀を振りおろす。

これが首をはねるコツである。

どうか、正座だけはしたが、おいねは、体がガタガタと揺れうごき、青ざめて血の気を失った顔に、悲しみを浮かべている。

すでに灰色に変じた唇がふるえ、それでも体をせいっばいにひねって、哀願のまなざしで、うしろの清三郎の顔を見あげようとする。

清三郎は、形通り、背後にまわり、正座しているおいねの両足の親ゆびを、うしろから、ギユウと踏んだ。

(あと数秒にして、この世と断ちきれぬ)。

みるみるうちに、おいねの生気が、全身から消えうせ、目の奥から、光がだんだんなくなっていく。

うしろから、じっとそのおいねの様子をながめていた清三郎の目が、とつぜん、ギロツと光った。

清三郎は、おいねのうしろから、どんと背中を突いた。

その瞬間、おいねの意識は、生のむこうのやみに散った。

「J.H.」

なんともいえぬ叫びをあげて、おいねの腰が、うしろ手にしぼられたまま、宙に浮いたかと思うと、一人の女の全重量が、落葉の上に、ドサツと、くずれ落ちる音がした。

その異様な声に、あたりの林の木々に、とまっていた鳥たちが おどろいて、バタバタといっせいに、空へ飛んでいった。

清三郎は、その鳥の姿を、しばらく空にながめていたが、やがて、足もとに倒れている おいねの姿を見おろして、ちいさな笑い声をたてた。

「まだ斬ってもおらんのに・・・」
刀は抜いていなかった。

意識をなくしたおいねは、顔をござにすりつけて気をうしない、うしろ手にくぐられたまま、前にのめって、腹ばいになり、腰を高くあげている。

あたりを見まわし、清三郎は、はかまの帯をゆるめ、おいねの着物のすそをめくった。

落葉のカサカサという音にまじって、けだものの唸り声のような、はげしい息が、ひとしきり、あたりにひびく。

やがて、林の間から、木々にまだ少し残っていた鳥が、再び大きな羽音をさせて、飛びさり、あたりは、急にシンと静かになる。

死んではいないが、おいねの意識は、もどらなかった。

彼が両手でつかまえていた、腰をはなすと、おいねはドサツと横に倒れ、落葉の中に埋まった。

清三郎が、顔をゆがめて立ちあがった時、おいねがふと動いた。
意識がもどったのである。

彼はひきつったような、いやしい笑いを浮かべた。

女が気を失った間に、はずかしめを加えた虚勢である。

顔が、自分ながら、ヒクヒクとふるえるのに、いらだっている。

しばられたままのおいねは、清三郎の顔に、ほんやりと、透きとおるようなまなざしを向けた。頬に涙が一筋つたい、唇がふるえた。

清三郎は、はっとした。

姦通ゆえに、この女を斬る役目を買ってはでた。しかし、親友の就幸の想い女であるという事実には、変わりない。

処刑する前に、こんなことをしたとなると、ただではすむまい。

もともと、就幸には知らせずに、内密のうちに、梶杜家の家来と、相談したことになるのである。

憔悴しきった就幸が、激怒して、刀のつかに、手をかける姿が、清三郎の頭いっばいに浮かんだ。

清三郎は、自分の罪におびえ、急にひざがブルブルと、ふるえはじめた。

彼は突然、刀を抜いて、刀身を横にして、左手で懐中紙をそえて、切っさきを、おいねの左乳の下あたりにあてて、ぐっと力を入れた。刀の先は、おいねの乳房の下に

深く入り、見る見るうちに、鮮血が噴き出しはじめる。

おいねの両眼が驚いたように、パツチリと開いて、物を問いたげに、彼の顔を見た。黒真珠のように、よく輝く涼しい目である。

顔をそむけて、清三郎はグイグイとえぐる。

おいねの体は、全身に力が入り、しばられた体を、清三郎の体に、すりよせるように反らして、固くなり、けいれんしている。しかし、やがて力をうしない、ぐたつとしていく。

「・・・」。

ふと、彼は息をのんで、動きをとめて耳をすませた。

どこかで、ピシッピシッと、落葉を踏む足音がしたような気がした。

清三郎は鼻の先でせせら笑った。

背徳を問われた上に、代金まで払ってある女を、どのような殺し方をしたからといって、非難するものは、この世に誰もいないはずである。

「・・・どうしたのか。市村清三郎ともあるうものが

つぶやきながら、彼は、かた足で、おいねの体を踏みつけて、力まかせに刀を抜いた。そして、そばのササの茂る深みに、おいねの体をけりころがした。

ふたつに折れたおいねの体から、血が赤汐のように、大量に噴出し続けている。

懐中紙で、刀の血のりをふいた彼は、さやに刀をパチッとおさめ、うしろも見ずに、山をかけ降りていった。

「むごいことをしやがる。」

やぶの中から、老人があらわれた。木こりである

さつきから、陰にひそんで、ことの始終を見ていたらしい。

おいねのそばに歩きより、乱れた着物を、ていねいにあわせてやっている。

「まだ息がある。」

息も絶えだえな体で、横たわるおいねは、口を動かして、なにかを言おうとする。

老人は、白い眉の下で、じっとおいねの口もとを見つめた。

「何か、言いいのこしは」

老人は、その耳に鋭く叫ぶようにしてたずねる。

そしておいねの唇に、耳をぴたりと当てて聞いていたが、低く叫ぶような声で、おいねの耳にたずねる。

「へ、い、ま、か。平馬じゃのう。まちがいないか」

おいねの目が、うれしそうに輝いたかと思うと、見る見るうちに、その顔は、土の色に変じて、血の気を失っていった。

数分の後、おいねはこと切れて、木こりの老人の腕の中にいた。

老人は、かた手おがみに、女のめい福を祈った。そして女の髪を切って、紙に包んでふところに入れた。

老人は、まわりの枯れ木を集めて、火をたきはじめた。

山の頂上からは、おいねの死をいたむように、細く長い煙りが、空に静かにたちの

ぼってゆく。

老人は煙りをみあげながら、上着を脱いで、たき火の上に、かぶせたり、のけたりしている。

ノロシの信号である。

遠い山で、木を伐っている他のきこりが、この煙りの信号を読んだ。

そして手をあわせた。

・・・おらが見たで。女人が今、侍に犯されて、命を奪われた。この世に残した子の名は、平馬というた。

ノロシは、ことのあらましを、山から山へと伝えた。やがて、木こりを通して、ことのすべては、豊田や内田の農民に伝わった。

「おいねさんの魂は浮かばれぬ」。

人々は、低い声でそう語った。

数日後、市村清三郎は、また、このこと、この山にのぼってきた。

・・・どうもまずかった。やはり、俺も腰ぬけ侍になったな

片頬をゆがめながら、ひとりごとをつぶやいて、山道を歩いている。どうてんしておいねをおかした形跡が、ひとの目にわからぬように、しまつをしなかつたのが、ひどく気になっている。

平和が世につづく、刀を買いかえた時、新刀の切れ味をためす材料がない。また、ふだんから、すえもの斬りという剣の技を、たんれんするが、いくら上達しても、これも腕だめしがない。当然、犯罪人に目がゆく。

犯罪人の処刑は、刀かじの、鉄をやいた匂いも まだ消えぬ新刀が、侍の陰の依頼で、すえもの斬りの実験に、よく使われるのは、なかば公認されていた。

清三郎は、新刀を買ったこの際、試し切りがしてみたいと思っていた。

裏の社会には、そういう世界があつて、頼めばひそかに殺すべき人間を、抱えている屋敷もあつて、話は成立した。

夫に隠れて、不義密通を働いた女で、名をきけば、おいねであるという。

近ごろ鬱々として、楽しめぬ就幸の顔が、目にうかんだ。

侍社会に、背徳を問われたおいねが、幼な子に乳をふくませる、ささやかな日々は、しよせん、新刀ができあがり、試し斬りに提供されるまでの、期間を待っていただけの事なのである。

市村清三郎にとって、一番の関心は、かげろつのように、淡く短かすぎるこの女の生涯では決してなく、買い求めたその刀が、その高い価格にふさわしく、一振りで、人のこうべを切りおとせるかどうか、ということであった。

自分の欲望にまどわされ、まったく失敗して、無駄な結果におわってしまったことに、清三郎は、自分にひどく腹をたてていた。

頂上の地蔵尊の、そばの空き地には、ころがっているはずの、おいねの体がない。

清三郎は青ざめた。

・・・あの連れてきた小者が、かたつけたのだろう。まさか、生きかえるはずはない。無理にそう考えたが、清三郎は、何かひどく不安になった。

彼は細い山道を、息をはずませながらかけおりる。

何かいやな予感がして、えり首に、ソオツとするような、黒い戦慄に襲われ、彼は走りながら、うしろを振り向いた。

いきなり、横のやぶの中から、氷のつららのような、鋭い細身の刀のやいばが、キラツと閃いて、清三郎の足もとを狙って、すくいあげた。

むこうずねを、真正面から斬りはらわれた清三郎は、足がもつれたまま、二、三步前に走った。

すかさずその背中に、重ねて二の太刀、三の太刀が、浴びせられる。

一瞬のできごとであった。

木洩れ日の、光りに反射して、細い刀身が、音もなくきらめいた。

「ウワツ。」

清三郎は、自分の勢いで、二メートルくらい下まで、よろけながら走った。

道のそばの、背たけほどもある笹が、ユサユサと揺れ、右手に細い抜き身の刀をぶらさげたまま、やぶの中から走り出たのは、元服をすました青年楳村主殿守広品（ひろかず）こと、自然丸であった。

おいねがいなくなったと知った時、彼女が就幸の名を聞いて、見えない糸に、ひっぱられるように、ふらふらと、出かけて行ったことまでは調べていた。だが、まさか、それが伯父の名を使った清三郎の おびきよせとは気がつかなかった。

木こりのしらせを聞いて、かけつけては見たが、自然丸が見たのは、口きかぬおいねの、冷たい亡きがらである。

彼が涙をぬぐっていると、ふもとから 清三郎がのぼってくるのが見えたのだ。

つんのめって、道ばたの木にすがりつき、大きい息をしている市村清三郎に、広品は声をかけた。

「せつかく、保護寺にかくまったものを。だましておびきだして、はずかしめをくわえた上、あまつさえ、さしこらすとは・・・。」

今にも、泣きだしそうなまつげに、涙をためながら、青年の憤りの唇が、わなわなと震え、清三郎を見つめている。

相手が自然丸と気がついて、清三郎は刀を抜いた。いや、ただしくは抜こうとした。

その瞬間、清三郎のきき腕に、広品の細身の刀が、また、木洩れ日を受けてきらめいた。

「きさま。」

右腕を手首から失った清三郎は、広品をにらんで、歯がみをしてうめいた。しかし、こうまで、さんざんに敗れては、もはや立ちむかうことは、不可能である。

清三郎は、覚悟をしたのか、くずれるように、その場に座りこんだ。

「自然丸。就幸どのへのおわびだ。せめて、侍らしく、ここで腹を切りたい。すまん。首をはねてくれ」

と、声をふるわせて広品に頼む。

腹さえ斬れば、すべては美化される。清三郎の手首を落として、侍としての一生を奪った広品は、この姿に武士のむなしさを見た。彼はいきなり清三郎の顔に、つばをはきかけて言った。

「伯父上にはではない。殺したおいねさんへのおわびをするのだ、ばかもの。わたしは、お前のきたない首などはねんよ。命はたすけてやる。このまま脱藩して、二度とその姿を見せるな。こんど、私に刀を抜かせたら斬るぞ」。

といいすてて、刀をおさめて立ち去ろうとした。

「おつ。それは、かたじけない。市村清三郎、生涯、恩は忘れぬ」。

喜色を顔に浮かべた清三郎は、かた手でおがんだ。

顔をそむけた広品は、うしろを向いて、山道をおりようとした瞬間、木霊(こだま)に「危ない」と叫ぶ、おいねの声を聞いて、ハッとしてふりかえった。

おがむふりをして、左手でぬいた清三郎のわきざしが、まっすぐに飛んできた。

危うくかわした広品は、腰の刀をぬいたその勢いさま、清三郎の顔のまっ正面にぶりおろした。

・・・ウワァッ

眉と眉のあいだにおろされた、広品の光る刀身を見たのが、清三郎のこの世の最後であった。みけんがふたつに割れ、口から鮮血があふれ、清三郎の息が絶えた。

「こんど抜かせたら、斬るといったのに」

殺すつもりはなかった。

自然丸は、まだひくひくしている清三郎を見ながら、刀をさやにおさめた。

数日後、清三郎の死体が見つかり、大さわぎになった。

武士の惨殺事件である。

同心たちが周囲を調べた。

近くに女の死体が発見された。うつぶせの顔を起こして見ると、先日から、保護寺神上寺から、搜索願いが出されている女であった。侍の刀には、その女の血のあぶらが、ベツトリと浮いている。女に理不尽(りふじん)を働いた侍を、誰かが斬った。誰にもそれが一目でわかった。

(言うに言われぬ哀しみがあって、せつかく、神上寺に逃げこんだものに、何ということ。斬られてとうぜん)。

義憤が、その場にいわせれた同心たちの 胸に燃えた。

犯人は問われぬままに、結局、おかまいなしの不問に付された。

九章

それから数年あとの、長門深川。

豊田で、柳庵こと、フランシスコ毛利元鎮が昇天した。

平馬には勉強をさせよというのが、そばに付きそつた家臣松村への、柳庵の申しつたえである。

平馬は、唐津の近松寺にやられる。

その近松寺を經由して、梶杜家とは無縁の、自由な民として、新しい生涯の旅だちをしてゆく。

今は元服して、梶杜主殿守となつた自然丸が、この長門の港まで連れてきて、見送りに立つ。

近松寺の和尚に、腕をつかまえられ、港を出る船のへさきから、不安げに、こちらをふりかえる小さい平馬。その姿が、海の間こうに見えなくなるまで、広品は岸壁に立つて、手を振っていた。

かえりに、あの駅通にあいさつにより、馬子たちにかこまれて、思い出ばなしにしばらく時を過ごしたあと、広品は、おいねと親しんだ袖ヶ浦の浜に足をのばした。

浜への波は、あの日のように無言で、ただひたひたと、浜に押しよせている。

かつての少年自然丸はそこに立った。

彼は唇をかんで沖あいをながめている。

ついにおいねを、救けることはできなかった。救われようのない愛であった。だが、その禁断の恋ゆえに、彼は孤独の日々に、たったひとつ、愛にはぐくまれ、感傷に満ちた思い出を残したのである。

海原のむこうを、彼はじつと見つめていた。

水平線のむこうの、やわらかい雲のかたち、彼はおいねのふくよかな姿を、思い出している。

小さい波が、沖あいから、つきつきに押しよせてきて、広品の足もとで、いったん引いて、ザアツと音を立ててくずれ消え、そしてうしろの波にゆずる。

彼は松林の小屋のとびらをあけて、中にはいり、そつと中のくらがりを見た。

あの日、ここで起きたできごととは、うそであったのかと思つほぐ、そこには思い出のかけらもない。

広品は足もとの砂をけた。

その瞬間、あのおいねをだいた時の、ひいやりとした砂の感触がよみがえつた。

彼はしゃがんで、砂をすくつて、両手ににぎりしめ、あたりをみまわす。

あの日、ていねいに、たたんで置いてあつた、鹿の子しぼりの帯や、女の熱い吐息が、記憶の中に、しだいにあざやかによみがえり、息がつまるような、したわしい思いが、広品の胸をつまらせる。

砂をにぎりしめる指さきがふるえ、砂がパラパラと、下に落ちた。

少しづるんだまつげをしばたかせて、広品はたちあがる。

とつぜん、ガラツと音をたてて、小屋の戸があいて、女が入ってきた。

「まあ。」

「一瞬立ちすくんだ愛くるしい女の声でした。」

「おいね!。」

彼はぎよっとして立ちすくんだ。

逆光線に照らされて立つのは、この小屋の持ちぬしの漁夫の娘であつた。娘のつしろには、日本海の沖あいの無数の波がきらきらと光っていた。

(第一部・おわり)

NEXT
NEXT

BACK
BACK